

書評

三佐川亮著

『ドイツ ― その起源と前史 ―』

(創文社・2016年2月刊・A5判・)
330頁・本体価格5,800円

多田 哲

本書は、著者が2010年に北海道大学に提出した博士論文「ドイツ史の始まり ― 中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成 ―」のうち、第2部「“ドイツ”の起源と展開 ― カール大帝からオットー朝の始まり(919年)まで ―」をもとに刊行されたものである。博論のうち第1・3・4部については、すでに同じ創文社より2013年に、博論同題で公刊されている。この前著を評者が入手した折、博論第2部が割愛された事情を知り大変に残念に思っていただけに、待望の本書である。本書はもとをたどれば、1996年から2006年にかけて発表された論文に行き着くことになるが、2011年のウィーン大学での在外研究の成果が盛り込まれるなど、大幅な加筆修正を経ている。ただ本評では、こうした成り立ちからは一応距離を置き、1つの独立した書として論評を試みたい。

まず本書の形態面についてであるが、本文を縦書きとした判断は正しかったのか。本書の性格上、類似のスペルを持つ原語の引用が頻繁に、また原文の引用もかなりを占めており、横書きの方が読みやすかったように感じた。そして本書では多くの図表が、本文中と巻末に分けて収録されている。図表番号はおおの振られているが、混同を避けるため通し番号にした方がよかったのではなかろうか。また巻末図表は1から5までがあとがきの後に、6から7までは別紙付録として裏表紙裏に添えられている。図表1から5は、大部の索引・参考文献・注の前に挿入されているため、同書の3分の2あたりに位置している。そのため、本文読書中に参照したい場合に探しにくい。文字通りの巻末に移動し、6から7に近い位置にすべきだったろう。

次に内容面の検討に入りたい。本書は、現在の国名のもとになった新高・現代ドイツ語の形容詞 *deutsch* の起源を探るものである。それは中高ドイツ語 *diutsch*、さらには古高ドイツ語 *diutisk* にまで遡る。*diutisk* の史料初出は1000年ころであるが、同語源のラテン語 *theodiscus* は、すでにカール大

帝時代に現れている。*diutisk*, *theodiscus* いずれにせよ、最初の事例では「ドイツの」という固有辞的語義はなく、「フォルクの」という普通辞的語義をなす言語呼称の形容詞であった。著者は以上のことを、研究者の間の一致の見解であると紹介する。さて第1章「ドイツ (*deutsch*) の起源」では、*diutisk* に至るまでの2つの仮説にまつわる研究史が整理されている。仮説 a では、比較言語の手法で再構成されるゲルマン語 *theudisk* が、まず存在したとする。*theudisk* の外的形態を借用して、8世紀後半に *theodiscus* が造られる。その流れとは独立して、*theudisk* の延長上に *diutisk* が現れるというものである。仮説 b は *theudisk* の存在を認めない。*theodiscus* はカール大帝統治下8世紀後半の知識人による人工語であり、それがドイツ語化されて *diutisk* が造られたというものである。両仮説支持者の「些細な争い」に見えかねない論争は、「ドイツ人のアイデンティティをめぐって、19世紀から20世紀前半にかけてのゲルマニスティック・歴史学を二分した政治的・民族的イデオロギーの対立構造が伏在している」と著者が説明することにより、にわかに興味を引かれる。すなわち、ドイツ「民族」が外からの影響を受けることなく自然に発生し、独自の成長を遂げていったと唱える人びとは、仮説 a を支持した。それに対して、「国家」がまず成立し、その枠内で「民族」が成長していったと主張する人びとは、「上からの」政策で *theodiscus* が誕生したとする仮説 b にくみする。著者は音韻学、言語史・歴史学の分野において、両者の論争を紹介する。著者はこの論争に関する自身の判断を保留しつつも(評者には、著者は仮説 b に傾いている印象を持ったが)、両者に共通の視点を挙げて、次のように止揚する。*diutisk* ないし *theodiscus* の造語は、この俗語の使用者と、ほかの俗語・ラテン語使用者との間に接触が生じ、両者を区別するためにおこなわれたと。さて、本章においてやや疑問に感じたのは、音韻学の取り扱いである。評者のような歴史学者には難解な分野であるが、丁寧に解説しようとする著者の心意気は感じた。しかし、「問題は、純粋に音韻学上の議論のみをもってしては解決困難である」と著者が言うとき、それではなぜ同書に音韻学に関する叙述が一定の位置を占めているのであろうか。音韻学と著者の主張との間に、何らかの接合点を見出したかった。

第2章「ドイツ (*deutsch*) の前史」では、*deutsch*

の意味を決定付けることになるラテン語形容詞 theodiscus/teutonicus の、語彙史の変遷が分析されている。時期は786年(theodiscus 史料初出)から919ないし920年まで、空間的にはアルプス以北だけでなく、イタリアの事例も対象となる。876年までの時点で、theodiscus が「フォルクの」という普通辞から踏み出したとも解釈できる事例は、イタリアでのみ検出される。それは Theodisci として言及され、アルプス以北出身の「フォルクの言葉を話す人々」の総称であり、固有辞に近づくつつあると著者は解釈している。しかし、それはあくまで他者の視点から把握された観念上の存在であり、Theodisci たちの自己理解ではないことを、著者は強調する。この theodiscus は、『フルダ編年誌』876年の項で初出の teutonicus (元来は古典ラテン語「テウトーネスの」) に取って代われ、11世紀半ばを最後に使用されなくなる。この交替と語義変化の因果関係についても、2つの見解が鋭く対立したことを、著者は紹介する。「内因説」は、9世紀後半のフルダ修道院において、「フォルクの」という語義をもつ theodiscus が不自然に感じられ、民族的基盤を探るなかでテウトーネス族にたどり着き、「ドイツ」の語義をもった teutonicus が考案されたというもの。上述の仮説 a に接続する。「外因説」は、純粋に teutonicus がエレガントな響きを有していたことを交替の理由とし、「フォルクの」という語義はそのまま引き継がれる。その後、「ドイツ」の語義を他称として獲得し、1000年ころようやく自称として使用されたというもの。仮説 b に連動する。著者はこの問題を、『フルダ編年誌』の文脈からアプローチし、teutonicus に「ドイツの」という意味を持たせる可能性は、編年誌作者になかったと述べている。「外因説」を補強したと言えよう。876年以降の用例のうち、「フォルク」という普通辞的言語呼称を超えた例は、西フランクにおける地理的概念、イタリアの語法の影響を受けた距離単位で使用された2例の Teutonica である。ここでも著者は、これらがあくまで他称用法であることを強調する。さて、本章で興味を引かれた点は、theodiscus を「用いたのがアルクインを起点とする人的ネットワークで結ばれた、当代を代表するごく少数の知的エリート集団に限定されていたという事実」を著者が容認していることである。アルクイン周辺の人物がこの語を使用したのは「事実」であったにせよ、多数の著作を残したアルクイン自身による事例は、本書では言及

されていなかったように思う。この語の誕生や普及に際して、彼自身が何らの役割も果たしていなかった可能性も、多分にあるのではなかろうか。

第3章『ザルツブルク大編年誌』920年の項の「ドイツ人の王国」では、第2章で未検討であった、『大編年誌』に見られる次の記事に検討が与えられる。「920年。バイエルン人は、すすんで大公アルヌルフに服従し、彼をして regnum Teutonicorum を統治せしめた」。『大編年誌』写本がアドモント修道院にて発見されたのは、1920年代のことである。当初この記事は、「ドイツ王国」の観念が、遅くとも10世紀初頭において、「ドイツ人」の意識にのぼっていた証拠と考えられた。しかしその後、この記事の同時代性に大きな疑問が呈されることになった。それは、regnum Teutonicorum という表現が時間的・空間的に孤立していること、写本作成時期は12世紀なかばと推定され、「ドイツ王国」という述語がすでにアルプス以北に普及していたこと、『大編年誌』が書写練習の産物であり、かつ Teutonicorum の最初の2文字に削除跡が見られることを理由とする。著者はこのうち同時代性の否定論者にくみし、可能な限りの徹底的な論証をおこなったと言えるだろう。第1に、12世紀アドモントにおける歴史叙述活動を検討することによって、『大編年誌』に対するオットー・フォン・フライジング「ドイツ王国成立論」の影響を指摘した。第2に、現存しない『ザルツブルク古編年誌』原本の918年の項で、「バイエルン人は、すすんで大公アルヌルフに服従し、彼をして regnum Baiowariorum (バイエルン人の分国) を統治せしめた」と記されていたという推定に立ち、12世紀アドモントでの「史料批判」の結果、918→920および Baiowariorum→Teutonicorum の書き換えがおこなわれ、それが『大編年誌』に反映されたと結論づけた。この章でもっとも重要な指摘と思われるのは、『大編年誌』は、920年の項以前のみならず以後もアルヌルフを一貫して「大公」と呼んでいることである。これはアルヌルフが「ドイツ王国」統治者、すなわち「国王」となったという920年の記述を、疑わせるに十分な事実である。しかし著者はこの事実を、章をかなり進めた時点で開陳している。その意図は、どこにあるのだろうか。

本書が一冊の研究書としての一体性を損なう側面が見られたことは、やや残念としなければならないだろう。第1章の末尾でプリンクマンの引用をもって、「ドイツ」の形成史にとって重要なのは、ラテ

ン語 theodiscus の用例であって、古高ドイツ語 diutisk などのゲルマン語ではないことを、著者は容認している。ならば、なぜ第1章が本書に必要であったのか。いずれにせよ、第1章と第2・3章の間に溝を意識させられた。また第3章の直後にあとがきが位置しており、本書に結論部分がないことも、やや奇異に感じられた。本書が論文集ではない以上、何らかの結論部が欲しかった。

本書が扱った「ドイツ」の起源という問題は、本邦では山田欣吾が1980年の論文で扱い、同論文は『教会から国家へ——古相のヨーロッパ——』（創文社、1992年）にも収録された。そのことで、日本の西洋中世史学界ではよく知られたテーマとなったが、山田を継承しようとする研究は、しばらく現れなかった。著者はこのテーマを、ドイツにおける先行研究を洗い上げることからはじめ、はるかに徹底的におこなった。次にこのテーマにおいて著者を継承し、あるいは凌駕するような研究が、現れるのだろうか。

（中京大学教授）

芝修身著

『古都トレド』

——異教徒・異民族共存の街——』

（昭和堂・2016年2月刊・四六判・xiv+204頁・本体価格2,700円）

黒田 祐我

本書は、いわゆる「レコンキスタ」運動が劇的に進展した中世盛期（11世紀から13世紀）において、カスティーリャ王国の最重要都市トレドが辿った魅力的な歴史を紹介したものである。古代から諸民族・諸宗教が入り乱れるなかで歴史が紡がれてきたイベリア半島のちょうど中心に位置するこの要衝は、著者の言葉を借りれば「異民族混交の街」として突出した存在であった。この特質は、711年以後に半島南部に定着したイスラーム勢力（アンダルス）による支配期においてより強められたという。同都市を征服したカスティーリャ・レオン王アルフォンソ6世以後、中世盛期を通じて維持された言語と習俗、そして宗教が混淆する状態から生み出された営為を紹介している本書は、文化と文明を異にする人同士がともに暮らすことの重要さ・困難さを我々に考えさせてくれる。十字軍、正統と異端、ユダヤ人迫害

といった、宗教と政治をめぐる軋轢で彩られた中世西欧史における、宗教的寛容を体現したオアシスのごとき場としてのトレドのすがたを、流麗な文体で描き出すことに成功した労作といえよう。以下、論点ごとに評者の見解を述べていきたい。

第一に、アンダルス統治時代における都市トレドに関してである。アンダルス史研究を近年牽引しているE.マンサノ・モレノ¹⁾は、そもそも後ウマイヤ朝の権威・権力自体が極めて脆弱であった点を強調している。強制力の弱い王朝のもとで、地域的な多様性を含みながらもまとめ上げられたのがアンダルスであり、とりわけ「キリスト教世界」との国境域に配置された辺境区（トレドもそのひとつ）においては自立傾向が顕著であった。後ウマイヤ朝政権によるトレド支配は反乱によって幾度も遮られ、この反抗を成功させるためにトレド民はアストゥリアス王オルドーニョ1世と同盟すら結んでいる。近年強調されるこのようなアンダルス内部の多様性を考慮したうえで、1085年以後のトレドの辿った歴史を描く必要があるのではないか。

第二に、1085年のアルフォンソ6世による征服後における都市内の状況についてである。現在、「三つの文化の都市（la Ciudad de las Tres Culturas）」として世界遺産に登録されているトレドの市街地で、まさに三宗教の信徒が肩を並べて生活する状況が現出したことは事実である。アンダルス支配時代、既に都市内には、ムスリム、ユダヤ教徒、そしてキリスト教徒（モサラベ）が居住していた。ここに新たに征服者層として「カスティーリャ人」や「フランス人」が入植してくることによって、まさに民族と宗教のアマルガムとなった。この征服後の都市内の状況をめぐって長らく議論が尽きないものの、現在の中世トレド都市史を牽引しているJ. P. モレナーは、ムスリムが政者層が、征服前夜に早々にトレドを去っていた点を強調する。そればかりか、ムスリム（ムデハル）庶民もまた、度重なるムラービト朝によるトレド攻撃の際に乗じて、アンダルスへの逃亡を選択したのではないかと主張する。しかし11世紀から12世紀にかけてのムデハルの逃亡あるいは残留を示す直接的な証拠は乏しく、たとえばアラブ史家M. J. ルビエラ・マータなどは、残留せざるを得ないムデハル庶民らが大規模にキリスト教への改宗を選択したのではないかと主張する²⁾。この一見相反する双方の意見をうまくまとめながら、著者は残留したムデハルではなく、残留したキリス

ト教徒、すなわち「アラブ化した」モサラベこそが、イスラーム文化との橋渡し役として活躍したのだと主張する。事実、12世紀にトレードで社会的・経済的、さらには翻訳運動における文化的な貢献度という点で、モサラベの活躍が突出していることは間違いない。しかしモサラベはキリスト教徒である。アラビア語に堪能であったことは事実であるが、モサラベをイスラーム文化の担い手として即断するのは適切なのであろうか。

第三に、「十二世紀ルネサンス」におけるトレードの役割に関してである。この知的運動を下支えた大翻訳運動の舞台として、トレードが果たした役割の重要さは、言を俟たないであろう。本書の「国境の国際都市トレード（12世紀）」と題された第四章では、これまで主に西欧文化史家によって語られてきたトレード翻訳運動を、同時代のイベリア半島をとりまくマクロな政治・軍事情勢の中に位置づけながら、トレード市内というミクロな空間における翻訳活動の実態を最新の研究状況を反映させつつ論じており、全体像を把握するのに有益である。さらに第六章においては、我が国ではあまり取り上げられることのない13世紀のトレードにおける知的活動のあらましを紹介する。これによって我々は、中世盛期のトレードが保持し続けていた知的ダイナミズムを一望することができる³⁾。

そして第四に、著者の中世スペイン史全体に対するまなざしに関してである。確かに著者も断っている通り、本書は12世紀から13世紀のトレードを中心として展開した異文化混交の歴史の一面を描くことに限定されているものの、全体を通読して強く感じるのは、『寛容の文化』を著したM. R. メノカルと類似の史観である。メノカルによれば、「矛盾を許容する（もっといえば助長する）アイデンティティという、それ自体矛盾した観念」を最大限花開かせたアンダルス精神は、カスティーリヤ歴代国王の政策と実践によって継承された。そしてこの結節点となったのがトレードという街であった。11世紀以後、ピレネー以北の西欧から教皇の喧伝する十字軍思想が、南からは原理主義的なジハード思想がもたらされ、多元性を許容する文化の混淆状態を理想とする「ヒスパニア」の精神は摩耗されていった。これが中世後期（13世紀後半頃から15世紀）にかけて不可逆的に進行し、1492年のグラナダ陥落とユダヤ人追放令をもって、寛容の中世スペインから、不寛容の近世スペインへと移行した。このような図式

である⁴⁾。

この史観において、特に誤解を招きかねないと思われるのは以下の点である。北のキリスト教徒社会であれ、南のアンダルス社会であれ、生来寛容な精神を持ちあわせているイベリア半島固有の諸社会と、反ユダヤ・イスラーム主義の強い「フランス」、異端撲滅・異教徒排除に邁進するローマ教皇庁、そして原理主義的なベルベル系王朝（ムラービト・ムワッヒド両王朝）とが、過度に対比させられているのである。しかし本来、A. P. プロニシュが詳細に論じたように、半島のキリスト教徒社会は、西ゴート王国時代から連綿と聖戦思想を独自に維持してきた⁵⁾。11世紀に生じた北のキリスト教諸国と南のアンダルスとの政治関係について、「力関係が逆転するなかで平和が戻り、一層交流は深まった（43頁）」と述べるものの、コインブラ征服（1064年）や度重なるアンダルスに対する軍事侵攻、そしてトレードの征服行為もまた、半島に固有の軍事的衝突と言えるのではないか。イベリア半島に固有の宗教的寛容を強調し、不寛容を外因のみに帰そうとする態度は、むしろ著者が「国粋主義的（138頁）」と断ずるR. メネンデス・ピダルや、C. サンチェス・アルボルノスの論じ方であったのではなかろうか。

もう一点、全体を通読して気になったのは、著者のイスラームに対する理解である。アラビア文化、アラビア人知識人とイスラームのそれらとをほぼ同義として用いているが、周知の通りイスラーム文明あるいはイスラーム世界なるものは、生粋のアラブ人のみが居住した空間ではなかったし、またアラビア語のみで意思疎通がなされていたわけでもない。アンダルスをはじめとするイスラーム世界でも、キリスト教徒やユダヤ人に対する迫害は頻繁に生じていたし、「フランク人」の入植した聖地十字軍国家では、逆説的にも苛烈な宗教的迫害が起きることはなかった。そもそもイスラームという信仰に対する敵意が、イスラーム世界の民や文化全般に対する憎悪に直結するという仮定自体、著者が近代的な観念にとらわれていることの証左ではなかろうか。また、主として中世後期に花開くムデハル様式は、イスラーム文化といえるのであろうか。西ゴート時代から続く建築様式を、マグリブ・アンダルスの諸王朝が継承し、さらにキリスト教諸国内で「ブーム」を巻き起こしたこの様式を「イスラーム」としてしまうのは、逆にイベリア半島の文化の異種混淆性に誤

解を与えかねない。

以上、一般の読者あるいは大学での西洋史入門者を想定しながら、中世スペインの息吹を今に色濃く残すトレードの歴史を紹介することを目的とした本書に対する書評としては、少々批判的にすぎたのではないかと危惧している。本書が、いまだ日本語による成果が極めて少ない我が国の中世スペイン史研究に対する、欠くべからざる貢献であることに異論はまったくない。著者の思い入れのある街として紹介されているタラベラ・デ・ラ・レイナをはじめとするタホ川流域の諸拠点では、トレード以上にムデハルが多数居住していたとのことで、是非、次なる力作を心待ちにする次第である。

(信州大学准教授)

註

- 1) Manzano Moreno, E., *La frontera de al-Andalus en época de los Omeyas*, Madrid, 1991.
- 2) Molénat, J. P., "Tolède à la fin du XIe siècle et au début du XIIe: le problème de l'émigration ou de la permanence des musulmans," in *De Toledo a Huesca. Sociedades medievales en transición a finales del siglo XI (1080-1100)*, C. Laliena Corbera and J. F. Utrilla Utrilla eds., Zaragoza, 1998, pp. 101-111; Rubiera Mata, M. J., "Un insólito caso de conversas musulmanas al cristianismo: las princesas toledanas del siglo XI," in *Las mujeres en el cristianismo medieval: imágenes teóricas y cauces de actuación religiosa*, A. Muñoz Fernandez ed., Madrid, 1989, pp. 341-347.
- 3) 我が国では熊倉庸介氏が翻訳運動に関する論稿を多数発表されている。たとえば熊倉庸介「イベリア半島を中心とする翻訳活動に関する歴史年表——13世紀まで——」『紀要（国際短期大学）』26（2011）、21-44頁。
- 4) M. R. メノカル（足立孝訳）『寛容の文化——ムスリム、ユダヤ人、キリスト教徒の中世スペイン』名古屋大学出版会、2005年。
- 5) Bronisch, A. P., *Reconquista y guerra santa: la concepción de la guerra en la España cristiana desde los visigodos hasta comienzos del siglo XII*, M. Diego Hernando trad., Granada, 2006.

Yuichi Akae

A Mendicant Sermon Collection from Composition to Reception: The 'Novum opus dominicale' of John Waldeby, OESA

(Turnhout: Brepols, Mar.,
2015, XVI+360p.)

木村 容子

本書は、14世紀に托鉢修道会士ジョン・ウォールドビーが著した範例説教集『新主日説教集』（未刊行）の分析を通して、説教著述から受容に至る過程を考察したモノグラフである。赤江雄一氏がリーズ大学に提出した博士論文をもとにした本書は、教父から宗教改革期までの説教研究を扱った説教叢書（ブレポルス社）の一冊として刊行され、すでに英文の書評で高い評価を受けている。

中世後期の托鉢修道会説教は活版印刷以前的大量言説普及システム、いわば「マス・メディア」として機能していた（D. ダブレー）。では説教師は何をいかに伝えたのか。著者は序論で、①説教関連史料の大量生産のみでなく、そうした言説の大量普及を可能にした全体的なメカニズムやインフラの理解が重要であり、また②説教内容と形式は不可分であるため、形式（とその背後にある中世人の思考法）にも注意を向ける必要を説く。そこで著者が選んだのは、一つの範例説教集全体を扱い、それを多角的に考察する方法である。本書はこれを「垂直的アプローチ」と呼び、いくつかの範例説教集から特定の日曜日の説教を抜き出して比較する「水平的アプローチ」を取る従来の研究では得難い、説教をめぐる知のマイクロコスモスを提示している。

本書は、序論・結論のほか、2部構成で6章からなる。第1部（1-3章）は、『新主日説教集』（以下、『新主日』と略）成立のコンテキスト再構築に向けられ、ウォールドビーとその拠点であったヨーク修道院について考察し、第2部（4-6章）は、約60の説教を収録した『新主日』の説教形式を分析、説教師の思考に迫ってゆく。以下、本書の内容を概観し、コメントを加えたい。

第1部「場面設定」の第1章「ジョン・ウォールドビーと『新主日説教集』」と第2章「説教とアウグスティヌス隠修士会の修道院教育」は、不正確な点のあった先行研究を見直してウォールドビーの経

歴と著作を整理し、彼が属したアウグスティヌス隠修士会の修道院教育を概観することで、『新主日』の執筆状況を浮かび上がらせている。著者は『新主日』執筆の時期を1349年、場所はヨーク修道院と推定し、現存する15世紀の二写本から、『新主日』が説教師をめざす同修道会の若手修道士たる「若者(iuuenes)」そして間接的にその聴衆となる俗人に向けて執筆され(D写本)、さらに一人前の説教師にも利用されていた(B写本)と解釈する。

第3章「説教師の図書館」は、ヨーク修道院図書館目録(1372年作成)にもとづき、同図書館の編成を再構成してゆく。著者は、これまで軽視されてきた板表紙製本(ligatus)図書を館内閲覧用参考図書として捉え直し、蔵書が説教支援のために組織され、『新主日』は参考図書として重視されていた点を指摘する。本章の意義は、地方の修道院図書館が、パリを頂点とする巨大な説教システムの一部を担い、情報伝達の「中継地」として機能、時に「情報発信地」でもあったことを、托鉢修道会として後発のアウグスティヌス隠修士会について明らかにした点にある。

第2部『『新主日説教集』の説教分析』第4章「ウォールドビーの説教形式」は質量ともに本書の中心部分であり、13世紀以降に優勢となった「新説教」(聖書の一節を主題に挙げ、その解釈を分割しながら展開していく説教)について、ウォールドビーの『新主日』と聖職者ベイスヴォーンのロバートが著した説教術書『説教形式』(1322年)が詳細に比較される。特に重要なのは次の3点である。第一に、著者は、14世紀イングランドで活動した両者がほぼ同じ新説教の形式・テクニクを規範として共有していた点を説得的に論じている。「説教術書」というジャンルが実際の説教を反映しているのか、研究者の間には慎重な見解もみられるが、著者は説教術書の内容が実際の説教でも使用されていたとするS.ヴェンツェルに同意し、説教術書の価値を再評価している。第二に、ベイスヴォーンとウォールドビーの間には細部において相違もあった。それが聖書引用に関わる説教テクニク「語的一致」と「意味的一致」である。無難な語レベルでの一致を選択するウォールドビーに対して、ラテン語を解さない俗人には意味レベルでの一致が有効であると説くベイスヴォーン。著者は、説教をラテン語で書き俗語で行なう説教師の心性に関わる文化的な問題として、これまで十分に検討されてこなかったこのテ

クニクに光を当てる。語的一致をさらに掘り下げた著者の邦語論文は、この問題の背景に潜むラテン語-英語翻訳の十分な能力をもたない「中間知識人」(J. ヴェルジェ)としての説教師たちの存在を指摘しており、本章と併読されるべきである¹⁾。第三に、汎用性を持ち、多様な目的や聴衆に合わせられる新説教のダイナミズムを「フラクタル」と著者が定義したのはきわめて的確であり、今後の説教研究でも重要な視点となるだろう。

評者の疑問を述べる。本章は14世紀のベイスヴォーンとウォールドビーの新説教は、新説教誕生の中心地であった13世紀パリのそれとは異なり、説教著述の手続きに対する厳格さがみられる点を実証しているが、そうした変化が生じた要因にまで踏み込んで著者の考えを提示してもよかったのではないだろうか。また修道会を越えて新説教形式が共有されていた点は評者も賛同するが、形式・内容面でアウグスティヌス隠修士会の特徴は何かみられないのだろうか。C.デルコルノは、アウグスティヌス隠修士会説教にみられる多様性・柔軟性(旧説教形式の使用も含む)を指摘している²⁾。著者の課題からは外れるが、たとえば『新主日』とイタリアの同修道会士トーディのトンマーズが14世紀後半に著した説教術書との比較などは『新主日』の位置づけにも資するのではないだろうか。

第5章「しるしの概念」は、説教における「しるし(signum)」を、世界認識の理論と記憶術の伝統という二つの文脈で考察する。著者は、中世後期の説教において、アウグスティヌス以来のしるしの理論の上に、古代の建築的記憶術が話者の頭の中だけでなく聴衆にも共有される形で復活した点を、『新主日』を例に示す。

『新主日』のしるし理論に関わる説教のひとつに、「太陽と月と星に徴が現れる」(ルカの福音書21:25)を主題聖句とする説教が挙げられている。評者がこのキリスト再臨、終末と最後の審判に関連する聖句から想起したのは、新説教に限らず、「しるし」が共通の思考法として機能しつつ、その字義的・霊的・道徳的解釈には多様性が存在した点である。中世後期、終末論的性格が懸念される一方、上記聖句をさらに「15の徴」のトポスと結びつけて展開し、天変地異のヴァーチャル・リアリティを聴衆と共有する説教師も少なくなかった。またロラード派やデヴォティオ・モデルナ支持者の説教では、上記聖句は独自の世界観を表明するのに用いられた(たとえ

ば太陽＝キリストを隠す日食は、俗人の聖書への直接的なアクセスを奪う聖職者を意味していた³⁾。彼らは人々になじみのある思考法を通して新しい思想を伝達したといえる。こうした「水平的アプローチ」からみえてくる解釈の多様性を真に理解するためにも、説教を支える思考法そのものを形式と関連づけて問う本書の「垂直的アプローチ」は示唆に富んでいる。

第6章「『新主日説教集』の全体デザイン」は、個々の説教から説教集全体へと視点を移し、ウォールドビーが聖節説教集 (de tempore) の一般的特徴を押さえながらも、独自の教育プログラムに従って『新主日』を構成したことが論証される。『新主日』が待降節でなく秋から始まり、カテキズム教育を兼ねた説教が最初に並んでいるのは、修道会で学ぶ年度初めの「若者」と、農業・商業活動の区切りでもあった聖ミカエルの祝日を終えて教会に戻ってくる俗人への配慮の結果であった。このように範例説教集の構造から読み手/聴衆の存在が感じられることは大変興味深い。

以上のように著者は『新主日』(と『説教形式』)を丹念に読み直すことで、その史料価値を一新させている。評者としては、だからこそ「結論」では、『新主日』から浮かび上がったマイクロコスモスを、マクロなレベルにおいて展望し、研究者の関心が多く向けられる13・15世紀に挟まれた14世紀をどう捉えるべきか、著者の展望を示してもらいたかった。

説教研究の重要性は20世紀最後の数十年に西欧中世研究において認識されるようになり、今世紀に入ると、部分的ではあれ説教史料の編纂が進み、研究内容は深化し、対象も拡大してきた⁴⁾。本書の問題関心に含まれた翻訳や記憶、受容・コミュニケーションについても多様な時代・地域を対象として研究がなされつつある。評者の専門であるイタリアでは、ラテン語で書かれた説教に表面的にはラテン語化された俗語の語彙が混入されるなど、説教が新たな言語実験の場 (C. デルコルノ) であることは早くから認識されていたが、なお研究の余地はある。また近年ではラテン語・俗語という垂直方向のみでなく、言語環境が複雑な地域での異なる俗語間の水平方向での交渉にも関心が寄せられている⁵⁾。多様な言語での比較研究が進むことが今後期待される。

本書は、理解が必ずしも容易ではない中世説教の約束事を、複雑な議論のあり様を変質させることなく理論的に読み解いてゆく魅力的な著作である。日

本でも本書が幅広い読者を得て、説教研究への関心が高まることを願いつつ、拙い書評を終えたい。

(大阪市立大学研究員)

註

- 1) 赤江雄一「語的一致と葛藤する説教理論家——中世後期の説教における聖書の引用」ヒロ・ヒライ、小澤実編『知のマイクロコスモス』、中央公論新社、2014年、14-41頁。
- 2) C. Delcorno, 'La predicazione agostiniana', in *Gli agostiniani a Venezia e la chiesa di S. Stefano*, Atti della giornata di studio nel V centenario della dedicazione della chiesa di Santo Stefano, Venezia, 10 novembre 1995, Venezia, Istituto Veneto di Scienze, Lettere ed Arti, 1997, pp. 87-108.
- 3) *The Last Judgement in Medieval Preaching*, ed. by T. Mertens, M. Sherwood-Smith, M. Mecklenburg, H. -J. Schiewer, Turnhout, Brepols, 2013. O' Mara, Mertens, Sherwood-Smith の論文を参照。
- 4) A. T. Thayer, 'Medieval Sermon Studies since *The Sermon: A Deepening and Broadening Field*', *Medieval Sermon Studies*, Volume 58 (2014), pp. 10-27. 日本での研究成果として、大黒俊二『嘘と貪欲』名古屋大学出版会、2006年(説教史料の概説も含む)。
- 5) J. Adams, 'Language Difficulties in Some Medieval Vernacular Scandinavian Sermons', in *Constructing the Medieval Sermon*, ed. by R. Andersson, Turnhout, Brepols, 2007, pp. 189-206.

佐々木真著

『ルイ14世期の戦争と芸術

—— 生みだされる王権のイメージ ——』

(作品社・2016年3月刊・A5判・)
516頁・本体価格6,800円

嶋 中 博 章

ルイ14世の治世は(信憑性はともかく)王自身が「戦争を愛しすぎた」と語ったとされるほど戦争に明け暮れた時代だった。実際、軍隊の規模でも戦争に費やした年月においても、この時代のフランスが

ヨーロッパ屈指の軍事大国だったことは間違いない。周知の通り、本書の著者佐々木真氏は、これまで絶対王政期のフランスをフィールドに兵士の徴募や物資補給など多様な観点から軍隊や戦争の問題を取り上げて、我が国における軍事史研究をリードしてきたひとりである。本書は著者の博士論文「フランス絶対王政期の戦争と芸術」を母胎とし、「各種の芸術作品において戦争がいかに表象されたのかをみることで、ルイ14世のイメージの詳細を明らかにする」（7頁）ことを目指す。ルイ14世の表象については、ピーター・パークやジョエル・コルネットの優れた先行研究が存在するが、しかし著者は、これらの仕事は「その視野の広さが魅力的であるが、それゆえに個別のメディアの特色については十分な検討が与えられていない」（9頁）と指摘する。そこで本書では、各種の「メディア」ごとに王権の表象戦略が丹念に分析され、戦争がルイ14世のイメージ形成に果たした役割が論じられる。

まず第1章では、個々のメディアの分析に入る前に、王権の芸術政策を担った人物と組織、そして彼らが目指した方針が確認される。ルイ14世の親政期、芸術政策の中心にいたのは建築長官の地位にあったコルベールで、「ルイ14世はコルベールの指揮のもと、さまざまな芸術家を動員して、芸術作品による「王の栄光」の表現と普及を推進していった」（23頁）。この目的のため、国内外の優れた芸術家を集めただけでなく、小アカデミーなどの助言機関を設立し、古典古代の教養を身につけた学者たちも芸術政策に関与させた。この方針はコルベールの後任ルヴォワの時代にも引き継がれ、彼ら二人の建築長官の下、「ある程度の一貫性のある政策が展開された」（28頁）という。

個別のメディア分析は第2章から第7章で行われる。「王の栄光」を伝えるメディアとして取り上げられる芸術作品は、ヴェルサイユを中心とする王宮の装飾、戦争画、タピスリー、メダル、版画、そしてパリの凱旋門と広場（その中心には王の像が据えられる）である。各章とも、それぞれの芸術作品についてルイ14世以前の歴史と、ルイ14世時代に制作に関わった人物と組織を概説し、そのうえで具体的な作品の内容を分析する。著者が「建築、絵画、彫刻などの視覚メディアにおいて戦争がいかに描かれていたのかを網羅的に調査」（8頁）すると宣言した通り、取り上げられる作品の数は膨大で、掲載された図像だけでも136点に及ぶ（中には著者自身が

撮影した写真も多い）。

こうした詳細な論述のあと、第8章では「表象の拡散」、すなわち「作り出されたイメージがどのように各社会階層に受容されたのか」（299頁）という問題が論じられる。例えば「1680年代には、地方都市を改造してそこに国王広場や国王像など、王権の権威を表象する建築物を設置する意向が中央政府にあり、それに地方が呼応するかたちで、計画が推進されていった」（302頁）。ところが「1690年代になると、国内諸都市での国王像設置プロジェクトは失速」（323頁）する。著者はその要因を王権と都市社団の関係、あるいは中央と地方の人的関係などから解き明かしていく。

最終第9章は、これまで分析した各メディアでの王の表象を比較対照し、その差異を考察する。ルイ14世を描くとき、その表現にはいくつもの選択肢があった。アポロンやヘラクレスになぞらえた神話的表象、アレクサンドロスやカエサルといった歴史的人物を通じた表現、あるいはより現実に近い写実的な描写。そのいずれを選ぶかは、時期により、あるいはメディアにより変化した。こうした変化の要因として、著者は新旧論争の影響やメディアの受け手の相違を挙げるが、興味深いのはルイ14世が必ずしも「戦争王」として表現されたわけではないという指摘である。著者によれば「オランダ戦争までは軍事的な勝利の表象にそれほどの積極性は認められない」。逆に「オランダ戦争が開始されると、「王の栄光」と勝利との結びつきが決定的となり〔……〕、あらゆるメディアで「戦争王」のイメージが発散された」（351頁）という。

オランダ戦争を王の表象の画期とみる見解は「結論」でも繰り返し確認される。その一方で、「アウクスブルク同盟戦争が始まると、戦争の表象は衰退期を迎え」、表象の世界では「1690年代になると、戦争への熱狂が影を潜めていく」（386頁）ともいう。その理由としては、アウクスブルク同盟戦争およびスペイン継承戦争という治世末期の戦争が目覚ましい勝利とは決して言えなかったことが大きい。ここから著者が導き出した次の見解は、本書のタイトルから見て意外に思われるかもしれない。「本書が対象とした時期においては戦争のイメージが横溢しているが、ルイ14世の表象における戦争の強調を当時の芸術全般のなかに位置づけてみると、それは一部の、そして一過性の現象であったともいえる」（388頁）。しかし、考えてみれば72年という長い治

世を誇るルイ14世が単一のイメージで表象されたと考える方こそ無理であろう。本書が何よりも成功しているのは、ルイ14世を「戦争王」という静止画に閉じ込めることなく、戦争という荒波の中で揺れ動く表象をその揺れともども描き出した点にある。

ただ、その揺れがときに読者にめまいを起こさせ、方向感覚を失わせるのも事実だ。「本書では、どのような作品が制作されたのかを網羅的に検討することが主眼であった」(446頁)と著者は語るが、実際、本書では戦争とは直接関連しない作品も多数紹介され、それらについても一つひとつ解説が加えられる。例えば、ヴェルサイユ以前の王宮とその装飾(第1章)、タピスリーの連作『ルイ14世記』における戦争以外の王の事績(第4章)、あるいは宝くじの宣伝や政治とは無関係な風刺を扱ったアルマナ(第6章)などである。もちろんそれらの解説は各メディアにおける戦争の位置を把握するうえで必要な場合もあろう。また、芸術政策の全体像を捉えるためには不可欠でもある。しかし、「戦争と芸術」の連関を主題とする本書においては、あまりに詳細な回り道は、行論の筋道をたどる妨げとなる場合もあるように思う。もう少し簡潔な説明でもよかったのではないか。評者にはそう感じられた。

他方、戦争以外の表象がもっと詳細に語られる必要があったと感じる箇所もある。すでに述べたように、表象の世界において「戦争王」ルイ14世という表象は、オランダ戦争を契機に1680年代にピークを迎え、アウクスブルク同盟戦争をきっかけに1690年代以降衰微する。その後も戦争を主題とした芸術作品は作られつづけるが、そのほとんどはオランダ戦争をテーマにしていたという。だとするならば、治世末期のルイ14世はいかなるイメージで捉えられたのか。あるいは王自身、いかなるイメージを追求しえたのだろうか。この点、著者は第8章で地方都市での国王像設置計画の挫折について論じた際、「[王は]自身の栄光を過度に誇張して表現する広場や騎馬像の建設に幻滅を感じた」(324頁)と語り、「結論」で「ルイ14世を中心として、表象への考え方が変化した」(387頁)と述べているが、その幻滅がもたらした変化についてはそれ以上踏み込んでいない。だが「戦争王」としての表象がもてはやされた期間と、それが好まれなくなった期間の長さはほぼ等しいのだ(オランダ戦争勃発が1672年、ルイ14世が最後に戦場に立ったナミュール包囲戦がアウクスブルク同盟戦争期の1692年、そしてルイ14世崩御が1715

年である)。王が戦場に立つことがなくなったスペイン継承戦争については図像から王と戦争の関係を論じることは難しいかもしれない。しかし、王が戦場に立たなくなったときにこそ「王の栄光」はいかに表象されたのか。啓蒙時代における王の権威の低下を考えると、やはり気になるところである。

とはいえ、今述べた指摘はあくまで評者のないものねだりにすぎない。これほど多くの図像資料を用いて、これほどきめ細かにルイ14世の表象を論じた研究が日本語で書かれたことはかつてなかった。

「ルイ14世期の芸術作品を美術史としてではなく、歴史学の素材として扱う研究は、端緒についたばかりである」(391頁)と著者自身が語るように、本書で示された論点は今後さまざまな角度から検討されるであろう。今後の研究の方向性として評者がとくに注目したいのは、地方都市での国王騎馬像の設置をめぐる以下の指摘である。「ブザンソンがドールとの対抗のなかで計画を打ち出したことや、エク스에騎馬像の設置が決まると、マルセイユもその意思を示したように[……]都市社団内での「王権の需要」もこれらのプロジェクトの実施から見えてくる」(325頁)。あるいは、王の所有する戦争画の複製を収集した二人の大臣に関する次の指摘も興味深い。「セグヌレイ侯はルヴォワをライバル視しており、[ルヴォワが所有する]ムードンの館に対抗するかたちでファン・デル・ムーランの作品を収集した」(339頁)(ついでながら、ここに登場する「セグヌレイ」Seignelayは「セニユレ」と表記した方が本来の発音に近いように思われる)。これは、王の寵愛を得るために芸術制作を通じて熾烈な政治闘争が繰り広げられていたことを意味する。評者はここに政治史と美術史をつなぐ道筋を見出した。もちろんこれは数ある可能性のひとつに過ぎない。いずれにせよ、美術作品の中に歴史研究の豊かな鉱脈が広がっていることを教えてくれた本書の刊行を心から喜びたい。

(関西大学助教)

ロバート・ロス著、平田雅博訳

『洋服を着る近代』

—— 帝国の思惑と民族の選択 ——

(法政大学出版局・2016年2月刊・四六判・)
326頁・本体価格3,600円

藤 川 隆 男

本書は、原題が示すように、衣服のグローバル・ヒストリーを扱った書物であり、ヨーロッパ世界の拡大にともなう、ヨーロッパ風の服装、つまり洋服が、各地で局地的な抵抗を受けつつも、どのようにして拡散し、受容されてきたかを全世界規模で描いた本である。著者自身が述べているように、ロスは服飾史の専門家ではなく、モードや服装の微細な変化を扱う意図がないので、こうした点を本書に期待しても無駄である。本書は、世界中で衣服の均質化がいかにして生じてきたかに焦点を絞っており、広い意味での社会的コンテクストの変化と衣服の関連を解き明かそうとした試みである。言い換えると一種のグローバルな社会史であって、広く歴史に関心を持つ人にとって、興味を掻き立てる一書であろう。

ヨーロッパ世界の拡張と、産業革命と呼ばれる技術や流通上の革新がもたらしたグローバリゼーションの結果、衣服の均質化が起こったとロスは主張する。もちろんこうした主張は陳腐なものにすぎないが、世界的な状況を一冊の本のなかに集め、比較し、いくつかの教訓を引き出そうとしたところに、本書の強みはある。しかし、逆に、それぞれの事例が十分に吟味されておらず、本当に各地の状況を正確に描き出しているのか疑問符がつく。また、ピーター・パークによる「世界の情報を網羅し、魅力的な事例が豊富で、理論と比較を使いこなし、経済・政治・社会・文化の視点でアプローチした総合的なモデルとなる作品」という本書の評価は、鵜呑みにはできない。なぜなら、一貫した比較の原則も、明確な理論も本書にはなく、あるいは少なくとも明示されてはおらず、主に各地の事例をテーマ別、時代順に並べて、描写するという手法が取られているからである。

次に本書の内容を、順を追って紹介する。第1章は、G8のような国際会議に集まる世界の首脳が同じような服装をしていることに注意を向け、それが400年くらいの間に起こった歴史的変化の結果であ

ることを指摘して、わかりやすく問題を導入している。それがグローバリゼーションの結果であることは明白であるが、重要なことはヨーロッパがそれを強要したというよりも、身体を覆うための規範は内面化される必要があり、これがいかにして起こったのかが重要だとする。衣服は、何にもましてアイデンティティの表明であり、絶えず変化しており、変わらぬ分析軸はジェンダーだけだとされる。そして、衣服体制の歴史は、階級、ジェンダー、民族、国民の闘争の歴史でもある。

第2章は衣服の規制を扱っている。衣服はアイデンティティの表明であることから、広い意味での政治的行為であり、権力者はその規制を行ってきた。奢侈禁止法が否定され、個人が着飾ることや流行が正当とされて初めて、近代衣服の歴史は始まる。第3章は、英仏、とりわけロンドンを中心とする地味で簡素な男性ファッションと、パリを中心とする派手で流行に左右されやすい女性ファッションが19世紀に確立した歴史を展望する。この展開は、公的空間を独占する男性と、そこから排除される女性というジェンダー構造の反映でもあった。

第4章はヨーロッパ以外への初期のヨーロッパの衣服の拡張を扱っている。これまでの部分はよく知られた歴史的事実が多いが、こうした世界への拡張を広く叙述している点が本書の強みである。中国・インド・オランダ領東インドなどのアジア、南北アメリカなどを順に検討し、その多様な状況を描いている。

第5章は、ヨーロッパの衣服が世界を席卷する基礎となった製造と流通の変革を扱っている。原料の生産、製造工程、既製服の市場、ジェンダーと女性服、衣服の民主化と型紙など、多くの事項が検討されている。

第6章以下は、第4章に続く章で、ヨーロッパ風の衣服の本格的な世界的流布を扱っている。第6章は、オーストラリア植民地、ラテンアメリカ、英領インドおよび蘭領東インドの主に19世紀の状況を検討し、第7章は、キリスト教宣教師による文明化と衣服の関係を、主に南アフリカの例によって示している。植民地社会の服飾史は、植民者との平等を主張する政治的な必要性によって生まれたとの主張で、この章は幕を閉じる。第8章は、植民地にならなかった地域におけるヨーロッパ風の衣服の採用を論じる。その最大の要因は、専制的な支配者が近代的な衣服を強制したからである。支配者たちは、衣服を

改めさせることで、臣民たちの心性を変えようとした。例としては、ピョートル大帝、明治維新、トルコやイランの改革が挙げられている。第9章は、アフリカにおける状況を扱い、植民地の現地人エリートが、近代性の証として、進んでヨーロッパ風の身を取り入れたと主張する。ただし、英語圏西アフリカは例外であった。さらに、インド、スリランカ、フィリピンの事例が示され、仏語圏アフリカの例で、同化主義政策が衣服に与えた影響が強調される。

第10章は20世紀における衣服の解放、第11章は、20世紀におけるジェンダーによる衣服の需要の差を論じる。第10章は一般的な概説であるが、第11章は、著者の論点を展開する部分であり、興味を惹かれる人もいるかと思われる。これに結論が加わって、本書は12章構成となっている。

ヨーロッパ風の衣服を着た人々の主体性を尊重するという著者の立場は首肯できるし、世界各地の衣服に起こった変化を全般的に扱おうとした試みは貴重だといえる。また、ジェンダーの差異に着目するのも、衣服に関してはありきたりではあるが、一つの重要な視点である。したがって、一読をお勧めしたいと手放して述べたいところではあるが、そうは言えない事情もあるので、以下で少し説明したい。

私の専門領域はオーストラリア、本書が扱うオーストラリアに関する描写は、ちょっと気持ちが悪く、一部はフィクションになっている。専門領域以外の衣服については無知なので、他の部分はクオリティが極めて高いのかもしれないが、本書の内容を、責任をもってお勧めする自信はない。

第6章118頁に、ブリテンの囚人をオーストラリアに「送還する」とき、囚人は着ている服をすべて没収され、くすんだ灰色と青の囚人服に着替えさせられた。これに対し、「現在のニューサウスウェールズ州にあるボタニー湾の流刑植民地の初代総督が、目立つ縞柄の布地を送ろうと一計を案じた。そうすれば、囚人服は質屋に持ち込まれなくなったであろうが、その積み荷が届いたふしはない」とあるが、まず第1に、囚人はオーストラリアに送還されるのではなく、送り出されるだけである。さらにボタニー湾植民地は当時の俗称で、後にニューサウスウェールズになるのではなく、すでにニューサウスウェールズ植民地であった。しかも当時の植民地には質屋はない（原著の誤り）。当時イギリスの慈善団体が貧者への施しが質屋に横流されるのを心配した

のと同じように、囚人服の流用にフィリップは関心を抱いていたが、質屋に持ち込まれる心配などともとなかった。また、「送ろう」は、使役動詞を訳出しておらず、「送ってもらおう」でないと意味をなさない。これに続く「執政官」は、イギリス史の人たちはふつう「治安判事」と訳していると思うが、イギリスがEUから離脱するのを機に名称が変わったのかもしれない。「タスマニア島のホバートに収監されていた女性たちは、働いていた工場の規則に抗議して」とあるが、女性たちは、「女性工場」という一種の監獄・教護院・救貧院・病院のような特殊な施設に入れられて、そこの規則に抗議したということ。多くは「働いて」もいただろうが、単なる工場ではない。

次の段落の冒頭の「そのため」は何のためか意味不明で、続いて「遅くとも19世紀初頭に」とあるが、「相応の地位ある女性が家事使用人を雇い、家の外で働かない社会」になり、ブルジョワ女性が判で押したように慈善活動にいそしむのは、まだまだ先のことである。1820年代くらいでは、ようやくシドニーの町でそうした状況がたまに見られただけである。

119頁の「メイトシップ」の思想により、富裕層が外見で差別化を図ることはなかった」という主張は、前頁の「富裕層は、…差別化をはかるため努力をおしなかった」とは正反対で、それがどうつながるのか理解に苦しむ。また、威信と経済力を持つ牧羊業を営む地主が街の流行に無頓着だったというのも、どうだろうか。彼らは地球の裏側からピアノを運んだ人々だということを忘れてはならない。注があやふやで、元の文献のどこを指しているのかが明確でなく、文献を適切に参照しているか判断がつかないが、著者の引用元文献のまとめ方がつまみ食いで、もともと論理的な整合性に弱点のある引用元文献の欠点を増幅しているように思われる。

147頁にはオーストラリア先住民のアボリジナルに関する記述がある。1840年頃入植したジェントル・ウーマンのメレディスが「燕尾服だけでも立派な衣装と考えられていたが、さらに、執事の燕尾服にボタンまでつけてやれる主人の誇りと威厳にはものすごいものがあつた」と書いた。同じような報告は他にもたくさんあり、ヨーロッパ人は明らかにばかばかしいと思ったが、本人たちはそうは考えなかった。私には、この文の意味がちんぷんかんぷんであつた。

原典のメイナードに当たると、このような引用箇所は存在しない。いや似た文はある。著者は孫引きをしているので、大元のメレディスに当たると、次のような部分がある。「時にはウェリントンブーツを片方だけはいて、他には何も身に着けない場合がある。身分が上の燕尾服を着た人間を黙らせることができた男の誇りと誇大妄想はたいそうなもので、これだけで十分な服装だと思われている。他の身に着けるものも、本来意図されていない様々な方法で着用される。例えば、腕の入るところに足を入れたり、その逆だったり」。(私の訳もよくはないが) 本当に同じ個所なのか自信がなくなるほどだ。夫が農場を所有するタスマニアの先住民の駆逐を正当化するためにも、メレディスは、先住民を道化師のように描写することで、明らかに馬鹿にし、嘲笑しており、こうした例は他の入植者にも多数あった。これは、先住民がヨーロッパ式の衣服を身に着けると、「身体の装飾と地位の証明だけが重要であった」という結論に対する適切な例なのであろうか。私には、メレディスの言っていることは、明らかに伝聞で、現実の描写ではなく先住民の戯画化にすぎないと思われる。

関連して気になるのは、209頁の西アフリカで、「遅くとも1860年代には、女性はクリノリンを着て、ハイヒールのブーツを履き」という部分である。クリノリンは現地人女性を馬鹿にするのによく使われた素材である。本書では、多くの事例の文脈が明らかではなく、その解釈にはかなり大きな？がつく。

オーストラリアに関連する部分だけで、全体のクオリティを論じるのは適切とは言えない。したがって、繰り返すが、他の部分は驚くほどクオリティが高いのかもしれないが、訳についていうと、77頁の「地方集会」という訳はどうかと思うし、83頁「民主主義と平等——奴隷制とジェンダーの範囲内に限られたが」のあたりの訳は、大学院生がそういう訳をすれば意味が分かっているかと聞き返すレベルだと思われる。117頁のマルクスに言及した部分は、「供給を重視する経済学者ではなかった」と訳してしまわずに（意味が変わると思う）、単純に「サブライサイドの経済学者ではなかった」とするほうが理解しやすい（ただシェインジアンでもなかったろうが）。

最後にまとめると、ざっと見て、世界的な洋服の広まりを概観するには適当な本だと思うが、一部分を引用しようとする場合には、原著、さらには引用

元を参照したほうが無難だと思われる。

(大阪大学教授)

Takashi Ito

London Zoo and the Victorians, 1828-1859

(Woodbridge: Boydell Press,
Feb., 2014, 216p.)

金澤周作

西洋近代史において、「文化の歴史」の研究は、政治、経済、社会の歴史と比べると、実は手薄なのではないだろうか。とりわけ、「文化史」的なアプローチが政治・経済・社会の諸相に切り込む際の有効手段とみなされるようになって久しい一方で、文化史の方法で「文化」的な素材を料理する試みは、乏しいように思われる。もちろん、食の歴史や服飾史、医療を含む科学史、音楽史やスポーツ史の各分野において、重要な進展があることは承知している。しかしその多くが、文化史的手法を援用する場合でも、最終的に、「実は〇〇は歴史的に非常に重要であった」という主張をなしてしまうがゆえに、いわゆる「文化」的なものの持つ儂さ、軽さ、局在性を掬い上げそこねている部分があると言えるのではないか。つまり、「文化」を等身大に読者に対して差し出してくれる文化史的な仕事は、歴史学においてあまりなされていないように思われるのだ。

そうであるがゆえに、英語で書かれた伊東剛史の単著は日本の学会で取り上げられ、評価されるべきだろう。本書は、ロンドン動物園という、この上なく「文化」的な対象に着目し、あくまでその儂く、軽く、局在的な次元において、文化史的に分析をすすめる。

本書は、1828年に設立されたロンドン動物園の、1859年までの草創期をフィールドにして、五つのケーススタディを行っている。それらを束ねるのは三つの大きな文脈・問題系である。第一に、文化をめぐる政治、すなわち、階級やジェンダーに規定されたさまざまな主体にとっての動物園の意味とその争奪・変遷のありさま。第二に、公共的な科学とは何かという問い、すなわち、動物園が誰のための科学の施設たらんとするかという、動物園自身のアイデンティティ模索のプロセス。そして第三に、動物史、すなわち、帝国やグローバルな規模で紡がれる

人と動物の関係、もっと言えば、「アニマル・エージェンシー」(14頁)の検討。以下、これらを念頭に置いて本書の内容を要約し、コメントを付したい。

第一章「動物スペクタクルの場」は、ロンドン動物園設立の経緯を論じている。1826年に、前シンガポール総督のT・S. ラッフルズを会長にしてロンドン動物学協会が結成され、この協会が1828年にロンドン動物園を設立する。これまでにない大きな施設をロンドンの中心で維持するためには、市民に受け入れられる必要があった。そこで、動物にまつわる不潔・悪臭のイメージを払拭すべく、動物園は「広々とした空間、新鮮な空気、清潔さ」(34頁)を、すなわち、動物たちにとっての幸福な居場所であることを、自己アピールした。そしてこのイメージを崩さぬよう、動物園で日々生じる「死」を隠蔽し、ひそかに新たな動物を補充し続ける運営に尽力したのであった。その結果、科学(動物学)とアメニティ(ガーデン)を融合させた場所として、リスベクタブルな人々に受け入れられるに至る。なお、動物園側のプロモーションの一貫として多く作られた色鮮やかな図版は、多くカラーで本書に採録されており、読者の理解を助けてくれる。

第二章「収集と展示」では、1827年にはじめてイングランドにやってきたキリンをめぐる不思議な「フィーバー」に注目する。キリン獲得の動機は、これまで絵でしか知られていなかった動物への好奇心のみならず、動物学での先行を許したフランスへのライヴァル心が大きかったことが、たとえばチャールズ・ライエルの1826年の言葉——なぜ世界に植民地を有する大国イングランドの「ミュージアム群がそれに見合った規模と壮麗さを備えた展示をして、すべての外国の競争相手を顔色なからしめることができているのか」(64頁)——などから示される。また、当初は科学的調査のための収集対象だったものが、次第に娯楽目的の展示物へと、動物の持つ意味が変化していったことも明らかにしている。最初のキリンは帝国内で調達できず、エジプト太守ムハンマド・アリーから「贈り物」として得ることができたこと、1836年にはロンドン動物園に四頭のキリンが展示されて人々を熱狂させたこと、量産された図像によってアラブ人込みのイメージが流布されたこと(「想像上の領域」(80頁))など、エピソードの面白さが際立つ章である。

第三章「アクセスの問題」では、ロンドン動物園への入園規制をめぐる交渉が描かれる。ロンドン動

物園は当初、限られたエリート層にしか開放(有料)されていなかった。これが容認されたのは、「公衆はミュージアムの運営において「実質的」に代表されている」と考えられていたからであるという。政治選挙における「実質的 代表 (virtual representation)」の概念と重なる洞察だ(89頁)。また、限られていたとはいえ、日曜開園や一般開放にからんで、中上流層のみならず、多くの男女が工夫して入園し、一生に一度の経験をしていることも、史料を駆使して示されており、社会史的に意義ある行論である。さらに興味深いのは、動物園をめぐるなされた議論が、ブリティッシュ・ミュージアムの公開方法に関して、さかんに引き合いに出された点である。

本書の中で質量ともにもっとも充実している第四章「科学と商業の間」では、巨額の入園料収入のあるロンドン動物園が、純粋な学術機関だと言い募れるのかという問題を扱っている。1840年代の財政危機を経て、47年に動物学協会事務局長の座に就いたデイヴィッド・ミッチェルが辣腕をふるい、入園者を増やし(たとえば、聖日曜習慣を維持する労働者向けの月曜開園(117頁))、展示動物を増やし、更新していった(118頁の表4)。こうして、「強力なストーリー・テリングの仕掛け」(122頁)と化した動物園からは、伝染性のあるさまざまな逸話(コブラに咬まれて死ぬ酩酊した飼育員＝労働者階級、など)が生まれ、図像や音楽において再生産されることで、まるで現代のアミューズメント・パークのように発展を遂げていく。この経緯の叙述はリズム良く、引き込まれる。

他方で、この発展はかえって科学団体だという建前と矛盾を来す。1843年の「科学・文芸協会法(免税法)」のおかげで救済のための教区税支払いを免れていたロンドン動物学協会は、1852年以降の訴訟において税の支払いを要求されたのである。会費(voluntary contribution)が動物園への入園権という魅力的な対価を伴っていること、そして動物園のゆえに協会が純然たる科学活動に従事する団体とはいえないことが根拠となって、動物学協会への免税措置は停止されることになる。意外にも救済と税がイシューになっており(マーティン・ドントンの重要な税の議論も参照される)、新鮮な驚きがある。結局、動物園は免税対象からは外れるものの、娯楽科学としてはポジティブに承認され、科学施設だという創設期の立ち位置からの変遷が描き出され、

説得的であった。

第五章「幻想の帝国」では、1850年代後半、上述のミッチェルが「動物学の帝国」の夢を抱いて主導したヒマラヤキジの順化プロジェクトの盛衰——結局プロジェクトは失敗し、順化はジェントルマン繁殖家の趣味の領域でしか存続しない——を描いている。科学そのものを扱うこの章では、帝国と科学は相互補強的な関係にあったという通説（「帝国の手先」としての科学）に留保をつけ、宣教と帝国の関係と同じく、ときに阻害し合ったことを論証している。本章のクライマックスは、現地の狩猟者やヒンドゥー教徒の富豪から、本国のアルバート公にまで広がるネットワークを再現してみせたところであろう（154頁の図24）。それぞれの意図は同じではないが、全体として一定程度機能したという主張には首肯させられる。

「結論——ダーウィニアン・モーメント」では、冒頭の三つの文脈・問題系に寄せてまとめがなされる。「文化をめぐる政治」の論点については、動物園側の差し出す幸福な動物たちのエデンの園というイメージ戦略は奏功し、動物園は公共の施設という位置づけを確保したというのが伊東の結論である。「公共的な科学」の論点に関しては、動物園が科学施設と公衆のための娯楽施設の両面を併せ持つ「ブリッジ」であったこと、関係する諸主体の相互作用の構造を有していたことを確認する。そして「動物史」の論点については、単純な「帝国の動物園」像からはみ出す諸要素、豊かな意味の場として動物園を位置づける。

全体を総括する前に、本書で十分に書かれていない二つの点を指摘しておきたい。実際には一つの問題である。第一に、序章で述べられていた「アニマル・エージェンシー」は、本論ではほとんど顔を出さなかった論点である。序章を読むと、動物を主語にした議論が展開されるのではと期待してしまう（タラの世界史、トラからみた中国史、のような）。ロンドン動物園を素材にするなら、少し触れられていた動物の供給と循環（死獣を生獣に取り換えるサイクル）をより前面に出すことも可能だったのではと思う。時期をずらせば、猛獣狩りや乱獲とからめた動物種保全の問題にもかかわっていただろう。そうすれば、科学者や公衆ではなく動物を主語にした歴史叙述ができたように思う。第二に、結論の副題でもある「ダーウィニアン・モーメント」の含意が、最後まで開陳されなかったことである。魅力的

なフレーズなので、本格的に展開してほしかった。ここで振り返ってみると、本書には、動物園の「死の経済（mortal economy）」（164頁）といった伊東の手になる独創的なアイデアを託したフレーズがほかにも出てくる。「知識の複合体（mixed economy of knowledge）」（168頁）など先行研究者の提示した目を引く概念もしばしば用いている。これらは伊東のすぐれた着眼点を示していると思う一方、それぞれのフレーズの含意が、総じて突き詰められずに終わっているとの印象も持つ。今後の課題として追究していくてくれればと願わずにはいられない。

本書には、よく知られた歴史上の有名人が多数顔を出している。ラッフルズ、ナッシュ、ダーウィン、ウォレス、パベッジ、バンクス、コベット、ディケンズ等々。読者に対し、この研究がニッチ的なものではなく、19世紀イギリスそのものと骨がらみになった射程の広いものなのだということを、随時思い出させてくれるかのようである。また、利用された史料の幅広さも特筆すべきである。動物園の内部史料や議会・政府関連のそれは当然としても、さまざまな図像、メモワール、そしてなにより、有名無名の人々の日記にあらわれる動物園の感想を丹念に拾い出す作業は、たいへん地道で容易にできることではない。博士論文ならではの労作である。

最後に一言。本書から引き出せる重要な知見は、煎じ詰めれば、ロンドン動物園とは、本来なら両立し得ないさまざまな思想や視角を共存させる融通無碍な場であった、というものになろう（80頁）。これは文化史アプローチがもたらすほとんど不可避のタイプの結論である。こうした総花的な主張が抱える本質的な弱さを無視するわけにはいかないが、それでも評者は、これこそが動物園のような「文化」の性質なのだと思うされた。ロンドン動物園はけっして、イギリス文化の根幹にも、階級やジェンダー規範の教化装置にも、ヴィクトリア時代人のアイデンティティの核にも、経済の推進役にも、科学の中心にも、帝国支配の要にもならない。そのような無理な過大評価を与えないで——こうした諸点がほんとうに「大きく」て「意義」がある究明課題なのかと問い直すこともできよう——、十二分に学問的に有意義な、文化史的作品があり得るということを、伊東の本は教えてくれる。そして、そのような成果は認められないという声が挙がるなら、そこから議論が始まり、そこで生まれたエネルギーは、歴史学を次のステージに推し進めてくれるのではなかろう

か。

(京都大学准教授)

佐野真由子編

『万国博覧会と人間の歴史』

(思文閣出版・2015年10月刊・A5判・)
(758頁・本体価格9,200円)

橋本 順 光

吉田光邦編の『図説万国博覧会史 1851-1942』(1985)および『万国博覧会の研究』(1986)から、およそ30年が経過した。1970年の大阪万博の記憶がまだ新しく、それだけに万博が学問的な、なかでも人文学の研究対象になりうるのか自明ではなかった頃のことである。John M. MacKenzie が *Propaganda and Empire* (1985) で帝国主義の宣伝メディアとして万博に注目し、彼が編集する帝国史シリーズで、Paul Greenhalgh による万博研究 *Ephemeral Vistas* (1988) が刊行されたことを思えば、先駆性を誇るよりもむしろ同時代性に注目すべきなのかもしれない。事実、これらの先駆的な著書の後、万博研究は欧米のみならず、世界の万博を題材にして各言語で膨大に積み重ねられている。

書肆を同じくする佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』は、まぎれもなく『万国博覧会の研究』の21世紀版といってよいだろう。吉田の万博研究会に参加したメンバーも本書に寄稿しており、吉田が執筆した南洋勸業会(1910)も一章をたてて論じられ、『万国博覧会の研究』が課題として残した東アジアにおける万博との関連も、最新の研究に従って詳述されている。取り上げられる万博は1851年のロンドン万博から2010年の上海万博にまで及び、地域も欧米からオスマン帝国まで、題材も万博の展示に関わった国々や人々から、理念や都市計画など個別の歴史との時に意外な関わりまで、読者を飽きさせることがない。

編者が「はじめに」で断るように(II頁)、本書の執筆者が狭義の「万博研究家」ではないからこそ、編年順に万博を語るのではなく、さまざまな万博を題材として各主題に切り込むことが可能となったのだろう。執筆者のバックグラウンドも多彩で、文体も文章も個性がほどよく混ざりあい、一本調子の論文集とはなっていない。韓国や中国の研究者による論文から、万博に実際に関わった「現場のプロ」の

貴重な報告まで、豊富な図版とともに25の章が一堂に会している様子は、まさにパヴィリオンが並ぶ壮观な万博を思わせる。間違いなく本書は今後の万博研究の金字塔として長く参照されることになるだろう。

構成は四部に分かれる。第一部「博覧会の人」は、公的な立場で万博を見学し、企画した人々と、万博での「国」としての出展に独自の関係を切り結んだアーティストとを対比する。佐野論文は初代駐日英国公使ラザフォード・オールコックの万博への関与とアジア観とを関連させ、すでに1878年のパリ博の段階で、日本の専門家としての自負が日本側の望む展示と齟齬を来していたことに注目する。この亀裂の事情を反対側から見事に説明するのが、1873年の岩倉使節団によるウィーン博覧視察についての芳賀徹論文、1878年のパリ博で欧州のジャポニズムを利用して輸出振興に貢献した前田正名についての寺本敬子論文である。そんな日本の軌跡に格好の補助線を与えるのが、ユク・ヨンス論文がとりあげるシカゴ博に参加した朝鮮王国の官僚鄭敬源であろう。実際、彼の迷いと揺らぎは青木信夫論文が描く1929年の西湖博で活躍した中国の建築家劉既漂と比較が可能であり、それはとりもなおさずグローバルとローカルの間で作品を展開したという点で、七宝作家の並河靖之についての武藤タ佳里論文、藤田嗣治と万博との知られざる関係を論じた林洋子論文も、実は同じ枠組みで論じることは可能なことに読者は気づかされる。

第二部「博覧会の場所」は、広義の都市計画や再開発との関連を扱う。日本統治下において博覧会場として使用された結果、朝鮮王宮が風水思想から切り離され、いわば一パヴィリオンとして脱中心化されたとするウィーベ・カウテルト論文は、こうした博覧会の政治性と錬金術が時代を追うにつれて洗練されていったことを、実感させずにはおかない。幻の1940年東京博の隅田川会場についての増山一成論文、大阪万博と千里ニュータウンの開発に同じ構造を指摘する中牧弘允論文、熊野体験博についての神田孝治論文は、正か負かは別として、この遺産が植民地支配を越えて継承されたことを示唆するからである。

第三部「博覧会と仕事・社会」は、博覧会に関わる日本独特の仕事や職業を、属人的な側面ではなく組織や技術の変容の点から解き明かす。渡辺洪基に注目することで明治の内国勸業博覧会が万博にほか

ならなかったことを指摘しつつ、各地の物産と技術を吸い上げるはずの理想がトップダウンの文明化へと乖離したという瀧井一博論文は、こうした万博の日本の変容を扱う第三部の中軸となっている。明治以降に発達した「ランカイ屋」こと展示専門業者を扱う石川敦子論文から、愛知万博のプロデューサーとしての企画と製作経験を記す澤田裕二論文、行政から見た上海万博と麗水万博での日本館出展事業についての岩田泰論文がゆるやかにつながり、博覧会を取り巻く官民の現場が生々しく浮かび上がるからだ。そんなグローカリゼーションの典型といえるのが、皮革を模造した日本の金唐紙であり、鵜飼敦子論文は、この「紙」が日本美術の技法や図像の応用というジャポニスムではなく、素材として西洋で浸透した事象に注目する。逆に橋爪紳也論文は、都市の電化を牽引する博覧会の歴史を概観し、イルミネーションが時に見世物と融合したかのような日本の興味深い事例をとりあげる。こうした猥雑性と不即不離であった文明化の居心地の悪さは、いわゆる「コンパニオン」が「女看守」と呼ばれた歴史と重なることを示唆する井上章一論文と見事に響き合う。

第四部「博覧会の形成と展開」は、博覧会を開催国との関わりのなかで歴史的に位置づける。パリ博覧会は実に「万物博」であったことを強調する市川文彦論文、しかし、その理念の流入のためには伝統を再創造せざるを得ず、そこにジャポニスムの影響まで及んでいたオスマン帝国の事例を概観するジラルデッリ青木美由紀論文、さらにオリエンタリズムとナショナリズムを巧みに共存させようとした中国の事例についての徐蘇斌論文は、万博をめぐる一つの興味深い類型となろう。一方、その妥協ともみえる南洋勸業会が上海万博と理念が共通することを指摘する武藤秀太郎論文と、東西の境界を攪乱する原始美術ブームと大阪万博との関わりに注目する川口幸也論文は、こうした枠組みの変容を示している。それだけに万博を積極的に受容し、牽引しようとする中国のダイナミズムを描く江原規由論文と曹建南論文は、歴史の大きな転換を実感させずにはおかない。

万博を契機として、万博を見学していた国が万博に出展し、さらには万博そのものを企画して主催する。オールコックの「世界を取り巻く帝国の連鎖」（47頁）という言葉通り、地理的にも歴史的にも万博が世界を一巡したことを、本書の読者は実感することだろう。実にオールコックは本書の章が記すと

おり「万博の人」といえる。たしかに1878年のパリ博で、オールコックは日本美術の西洋化を危惧しているが、同時に美点は模倣してしまえばそれでいいとも突き放した態度もとっている。この言辭は、パリ博で展示されたインド製品について、英国の悪影響を批判して大きな話題となったジョージ・バードウッドと比較できよう（彼に強く賛同したのがウィリアム・モリスである）。文明化に貢献する範囲で異国趣味を馴致する試みは、たとえばオールコックの中国での逸話——「発見」されたばかりのシフゾウだけでなく繁殖能力を特記して羊もロンドンに送った——と重なるように思えた。珍獣を収集する一方で、当時、すでに中国産の豚が英国に移入されていたことをおそらくふまえてだろう、品種改良への貢献を期待するというのは、万博そのものを連想させるからである。

話題が多岐に渡るため、あくまで気づいた範囲ではあるが、誤記と関連して気づいたことを記しておきたい。日本と朝鮮ほか極東の専門家としてWilliam F. Griffis（112頁）とあるが、ミドルネームは注44にあるようにFではなくEである。また万博にも援用された田園都市構想を提唱したのはP・ハワード（303頁）ではなく、E・ハワードである。南洋勸業会の建設を請け負ったのは、Atkinson & DallaではなくAtkinson & Dallasだろう。大阪の第五回内国勸業博覧会で踊ったカーマンセラ（457頁）は、ほかの人物名同様にCarmencellaと原綴を表記した方が後学に資しよう（このロイ・フラーのイミテーターとして活躍した米国のダンサーについては村山茂代の研究がある）。南通博物苑に所蔵された美術品として「アイロン絵、鉛筆絵」（607頁）とあるのは、原語が不明なため類推するしかないが、版画や線描画のことだろうか。こうした西洋絵画の技法と画材の齟齬と混淆は、絵画を意識するあまり、絵画にみえるように苦心して作られた無線七宝（151頁）や、逆に材料自体が西欧で重宝された金唐紙と比較できる現象であり、今後の研究が望まれる。ロンドン万博で売れ残りの紅茶を翌日に冷やして提供したことでアイスティーが生まれたとあるが（501頁）、残念ながら典拠も記されておらず、これはおそらく俗説ではないか。なお2013年の中国の報道に基づき、ロンドン万博の会場であった水晶宮の再建が2015年末には予定されているとあるが（709頁）、この計画は英国では早くも2015年には白紙となっている。たしかにロンドン万博の一参加者

でしかなく、その後、苦難の歴史をたどった中国が水晶宮を21世紀に再建するというのは、歴史的な帰結を示唆しよう。しかし、ここはむしろ水晶宮再建の頓挫にこそ、万博の意義と研究双方にとっての大きな方向転換が読み取れるのではないだろうか。

事実、ユク論文が述べるように、もはや万博はオリンピックやワールドカップに取って代われ、時代の使命を果たしたのかもしれない（124頁）。オールコックのいう「世界を取り巻く帝国の連鎖」は、その点でも示唆に富む。そもそもこうした楽観は、海陸の交通網と情報ネットワーク（海底ケーブル）が世界を一体化させ、人類を調和に導くとして、19世紀にはしばしばみられた。たとえば、それは1851年のロンドン万博で展示された機関車「エリアルガードル」に端的に要約されている（もっとも、魔法で地球を一回りと述べるシェイクスピアの妖精の名はエリアルではなくパックなのだが）。これはちょうど新幹線や飛行機で結ばれた都市が、規格化の範囲内で地方色を演出するという現代の事象と連続してまいいか。さらにいえば飛行機の客室乗務員は、かつての「女看守」の末裔とさえいえるかもしれない。

こうした日常的な場に万博が拡散した経緯も、今後、しかるべき歴史研究がなされていように思われた。私見では、その最たる例はショッピングモールではないだろうか。たとえば Margaret Crawford は、その先駆的な論文“The World in a Shopping Mall”（1992）で、Robert W. Rydell の *All the World's a Fair*（1987）を意識してかどうか、ショッピングモールこそ万博の成果を受け継ぐだけでなく、いまや世界そのものを内包しようとしていることに注意を促した。以降に続いたモール研究は、ディズニーが参加した1964年のニューヨーク万博を転機として、それがモールのテーマパーク化を牽引したことを一様に強調する。しかし、社会学を主な領域とするだけに、万博の歴史（研究）が十分に参照されないうらみは否定できない。日本でも南後由和の「建築空間／情報空間としてのショッピングモール」（2013）が、ディズニーランドと密接に関連するアメリカのモールとは異なり、百貨店文化の延長としてショッピングセンターが発達したローカルな経緯を強調しており、その転機として人を満遍なく循環させるシステムを整備した大阪万博に注目している。ただ、ここでも歴史研究との架橋は、まだ開拓すべき余地があるように思われてならない。

そういえば大阪万博の一部の跡地は、遊園地を経て、ショッピングモールとなった。阪急電鉄が設立した西宮球場にしても、大東再建設博覧会、国防博覧会、支那事変博覧会、そしてアメリカ博覧会の会場を経て、取り壊されたいまは阪急百貨店を含む巨大なモールになっている（こうした情報は、石川論文が扱う乃村工藝社のウェブサイトでも容易に検索できる）。先に引用したユク論文は、万博のアジアでの主催が容易に覇権主義に反転することを牽制しつつ、「他者の存在に謙虚で、進歩・近代性・資本主義などのキーワードで序列化されることのない、新たな博覧会を発明しなければならないという課題に、私たちは直面している」という一文で締めくくられている（125頁）。これはある意味では、モールが理想とする世界と重なりはしないだろうか。少なくとも上海万博の掲げた「より良い都市、より良い生活」は、散文的とはいえむしろモールこそが実現しようとしているといってもよいだろう。いみじくもオールコックは、『大君の都』の37章で、「人類は、一大融合を経験しつつある。征服によらず、信仰の伝播によらず、日常必需品の交換によって、ひとつになりつつある」と同時代の記事を引用した。吉田光邦は大阪万博からおよそ15年後に万博を人文知の対象としてまとめたが、この融合の歴史という課題に、ひょっとして本書の執筆者と読者は直面することになるのかもしれない。

（大阪大学准教授）

小川眞里子 著

『病原菌と国家

—— ヴィクトリア時代の衛生・科学・政治 ——』

（名古屋大学出版会・2016年2月刊・A5判・）
488頁・本体価格6,300円

見 市 雅 俊

2012年、東京大学大学院総合文化研究科に提出され、博士号を取得した論文に、「大幅な加筆修正」をおこなったもの。本文は292ページ。索引・参考文献表等が合せて52ページ、そして註が128ページ。重厚な学術書である。

19世紀イギリス医学史の研究であり、3部構成。そのうちの「スエズ運河——帝国時代の医学」と標題のついた第Ⅲ部が小川氏の研究の出発点であって、その内容は「コレラとスエズ運河」として『思想』

に掲載されたが、その前に、国際的にもっとも権威のある医学史雑誌のひとつ、*Bulletin of the History of Medicine* に掲載され、さらにそれがドイツ語にも翻訳された。つまり、国際的にも高く評価された、ということである。実際、第Ⅲ部は医学史としてはもとより、国際政治史の研究としても十分に通用しそうな内容である。

それに対して、第Ⅰ部の「テムズ河——ロンドンの衛生改善」と第Ⅱ部の「漂う微生物の本性を追う」は、より医学史的であって、伝染病についての学説が、「ミアスマ」（普通は「ミアズマ」）説と「コンタギオン」（普通は「接触伝染」）説という、ペストの時代以来の伝統的な二項対立の構図から、19世紀末、「病原菌」説に収斂してゆく、その過渡期の錯綜した学問状況をあつかう。そこでひとつの基軸となるのが、「農芸化学」の始祖とされる、ドイツ人のリービヒである。すなわち、第Ⅰ部では、ロンドンにおける下水再利用構想とリービヒとの関わりが、第Ⅱ部では、イギリスにおける伝染病学説の展開に対して、リービヒの化学理論がおよぼした影響力がそれぞれの基軸となっている¹⁾。

第Ⅰ部から。19世紀中葉、水洗トイレを前提とした、ロンドンの近代的な下水道体制——「遮集式下水道」が完成した。今では常識となっているはずだがイギリスでも、かつては都市民の尿尿が肥料として再利用されていた。それが水洗トイレ——下水道システムにより投棄されることになったのである。そのなかで、リービヒの御宣託のもと、下水の再利用が検討され、そしてロンドンの近郊において「下水灌漑」というかたちで実現される、その過程が詳細に分析される²⁾。

この再利用「熱」には、もちろん、小川氏が強調するようにイギリスの農業経済の動向が深く関わっていた。同時に、本書があつかう19世紀中葉は、上下水道をふくむ、都市の大規模な土木工事が次々に敢行され、そして、本書にも登場するウィリアム・ファーマーも深く関わる、統計学の誕生の時代であり、数字の一人歩き現象がみられた。科学の進歩というものが無邪気に信奉された時代でもあった。かくして、下水の再利用論は一種の「永久機関」構想となったのであり、だからこそ、本書で明らかにされたように、広範囲におよぶ人びとの想像力をかきたてることができたのだ、とおもわれる³⁾。

第Ⅱ部では、先に述べた伝統的な二項対立がリービヒの影響もあって崩れ、百家争鳴の状態になり、

それがコッホ・パストゥールの時代となって決着をみる、その科学史上の過渡期があつかわれる。過渡期ゆえの、学術用語そのものもふくむ混乱。小川氏は史料を丹念に読み、手際よく論争点を浮き彫りにし、そうこうするうちにコッホ・パストゥールの最終的勝利がみえてくる、そのような当時の学界の状況を活写する。しかも、登場人物のキャリアや、相互の人間関係についても詳細な情報が呈示され、さらに、学会での講演や研究発表の現場も臨場感たっぷりに再現されている。また、この論争との関連で、医師に対してわざわざ手洗いを励行しなければならないような、当時の不潔な医療現場の実態が産褥熱を具体例として詳細に紹介されており、こちらもたいへん興味深い。

過渡期ゆえに、その前と後の時代ほどすっきりとした内容にはなりえない。そのような狭間の時代を取り上げ、そうして医学史上の手薄な時代をしっかりとカヴァーしたという点は高く評価されよう。一点だけ。「生体解剖反対運動」によって医学研究の発展が妨害されたことが本書のここかしこで指摘され、それがイギリスの「特徴」だったとまでされる。たいへん関心をそそられるのだが、まとまった説明がないのは残念である。

そして第Ⅲ部は、1869年のスエズ運河の開通を中軸にして、検疫をめぐる科学と政治のせめぎ合いが綴られる。全体の構図はこうである。スエズ運河の開通は、疫病の世界に即してみれば、インド発のコレラの渡来の危険性が増したことを意味した。案の定、1883年、エジプトでコレラが猛威をふるう。この事態に対して、ヨーロッパ大陸諸国とイギリスとの検疫に対する姿勢の違いが浮き彫りになった。大陸諸国はペストの時代以来の厳格な検疫制度の実施を主張した。それに対してイギリスは、簡略化された「医学的査察」を主張したのであった。もちろん、小川氏が強調するように、純粋に科学的な見地からの主張ではない。イギリスの姿勢は、その自由貿易帝国主義の一環だった。

がしかし、時代は19世紀。「政治」は、少なくとも「科学」をリスペクトするポーズをとらざるをえない。第Ⅲ部のハイライトは、その第7章「病原菌と帝国」において詳細に描かれる、劣勢に立たされたイギリス政府の反撃ぶりである。すでに第Ⅱ部で述べられているように、イギリスもふくめてヨーロッパの学界全体は、コッホ・パストゥールの病原菌説に傾斜しつつあり、しかも当座は、この新しい学

説は、伝統的な検疫制度に味方するようにもみえたのであった。この章の冒頭で小川氏はいう。

この件は、歴史的資料による詳細な再現が比較的可能な帝国医学の事例であり、…報奨金まで明確に約束した手紙や、イギリスを離れた当事者が胸の悶えを吐露した文面などから、帝国の衛生政策の推進手法が、時代を隔てても生き生きと伝わってくるのである。(247頁)

これまで注目されてこなかった論文、「公の名のもとにコレラとコンマ菌に関するローベルト・コッホの理論を論駁する」(『季刊顕微鏡科学』1886年)を足掛かりにして、小川氏は、イギリス政府が「一国の政府」としてなりふりかまわず資金と人員とを総動員して、支配的になりつつある病原菌学説をむきになって「論破」しようとする、「尋常」ならざる事態を克明に明らかにしてゆく。もちろん、その標的となったコッホの学説もまた「ドイツの国策」とけっして無縁ではなかった。

国際政治という大文字の歴史とコレラ菌の発見という小文字の歴史とが、スエズ運河とエジプトを舞台にして織り合わさる見事な歴史叙述であり、「帝国医学」(普通は「帝国医療」)の現場が、たしかに「生き生き」と蘇る。ちなみに、1879年、検疫を実行しようとする明治日本において、それを無視したドイツ船、ヘスペリア号事件が起きている。そして、イギリスは「醫師之診断法」を盾に、日本側の検疫を拒んだのであった⁴⁾。

21世紀日本の多くの西洋史学研究がそうであるように、ここでも意識されるアカデミックな基準はグローバル・スタンダードであって、第Ⅲ部はもとより、他の部分も国際的にも充分通用するレベルだろうと推測する。

最後に、構成上、読みづらいところがなくはなかったけれど、読んでゆけば、出版された博士論文にしばしばみられる「寄せ集め」ではないこと、「あとがき」で書かれている有能な編集者の助言もあってだろう、全体として医学史上の一本の筋がしっかり通っていることがみえてくるはずである。

(中央大学教授)

註

- 1) それだけ重要な位置づけをした以上、リービヒについては、もう少しまとめて論じてもよか

ったのではないか。その点で参照すべきだったのは、椎名重明『農学思想——マルクスとリービヒ』東京大学出版会、1976年。

- 2) 19世紀イギリスの衛生改革の最大の立役者、チャドウィックも下水再利用を唱えていた。小川氏はそれについてはごく簡単にしか触れていないが、私見によれば、それがすでにあったからこそ、本書であつかわれるような再利用熱もありえたのだとおもう。チャドウィックは、イギリスの低湿地帯における干拓事業が農業収益の増大のみならず、マラリア対策となって健康増進をもたらしたとする同時代人の分析を、ミアズマ対策＝都市の湿気対策＝下水道敷設・下水の再利用という構想へと昇華させたのである。拙稿「インド・コレラとイギリス・マラリア」見市他編『青い恐怖・白い街——コレラ流行と近代ヨーロッパ』平凡社、1990年。
- 3) そのような科学の「文化史」の文脈でみれば、本書では通説に従って貧困を論じた「社会改革の作家」として紹介されているヘンリー・メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』において展開される下水再利用論は、おおいに注目に値するはずである。拙稿「都市の生理学」吉田光邦編『一九世紀日本の情報と社会変動』京都大学人文科学研究所、1985年。
- 4) そして本書であつかわれている1885年の「国際衛生会議」(普通は「万国衛生会議」)に出席した、内務省衛生局第三部長、永井久一郎は次のように報告している。旧来の検疫法を実行しているのは、「歐州文明諸國ノ中ニ於イテモ最モ下等ニ位スル國」であり、イギリスは「衛生法周到ニシテ、清潔ナル」がゆえに、いち早く疫病禍から解放されたのである。拙稿「近代日本の検疫問題」『日本史研究』439号、1999年。

藤澤房俊著

『ムッソリーニの子どもたち

——近現代イタリアの少国民形成——』

(ミネルヴァ書房・2016年1月刊・四六判・)
344頁・本体価格4,000円

高橋 進

本書は、著者・藤澤房俊氏のライト・モチーフであるイタリアにおける国民形成について、統一国家

形成期からファシズム期までの小学校教育、特に小学校教科書に焦点を当て、「少国民形成」の歴史を研究した刺激的な労作である。本書のタイトルは『ムッソリーニの子どもたち』であるが、序章から第5章はファシズム政権成立まで、第6章から第10章がファシズム体制時代である。

序章では、イタリアにおける国民形成の手段として軍隊・言語・宗教・教育の4要素の状況が検討されている。政治指導者たちはサヴォイア家と憲法を柱とした立憲君主制に依拠し、国民統合と国家建設を進めた。イタリア王国への併合の住民投票により国民の意思による国家成立を演出したが、南部では国王は知られていなかった。カトリック教会がローマへの王国軍侵入と教会領の併合に抗議して、1861年3月にイタリア国家を否認し、関与者の破門を宣言したことは、新国家への国民の統合を進めるうえで大きな障害となった。統一過程が生み出したこのような困難は「二つのイタリア」の存在と捉えられ、学校教育はその克服を大きな使命としていた。

第1章では1861年の国勢調査と1865年の小学校調査報告に基づき、イタリアの識字率の南北格差（北部約59%、南部約10%）及び都市と農村の格差を明らかにしている。教員不足とその低い質、国家と教会との対立、学校教育での方言の広範な使用も問題であった。教科書は認可制で一定の自由があったが、政府は「教育指導要領」を制定し、教育を規制した。そこでは、市民の「政府への服従」と「祖国を愛し、奉仕する」義務が強調されていた。

1876年からの「歴史的左派」政権時代（第2章）の特徴は「銅像の季節」と呼ばれるほど、全国各地に「祖国の父」エマヌエーレ2世の銅像が建設され、国王の生涯が教科書や読み物として出版された。

義務教育を3年に延長し、識字率の向上を図るとともに、義務不履行の親に対する罰金制度を導入した。新教科「市民の義務」は憲法に基づく市民の権利と義務を教えるだけでなく、「父である国王」への「子としての国民の信頼や愛情」の醸成を目的とした。

19世紀末には（第3章）、リソルジメントの遺産に民主的なものを加えて、「民主主義者と君主主義者を「和解」させようとした」。ガリバルディ像の建設とイタリア王国軍がローマに侵入した9月20日を憲法記念日に続く第二の国家祭日としたことはその表れである。『農民と職人』『徳と労働』『人間と祖国』等の多様な教科書が出版されたが、それらは

小学生用、軍隊内での識字学級や大人のための夜間学校・日曜学校用であった。

20世紀初頭から第1次大戦勃発までの工業化と都市化、リビア植民地化のジョリッティ時代には（第4章）、義務教育の4年への延長、読み書きのできない成人のために、3,000校の夜間・日曜学校の設立、5・6年の民衆コースが設置され、非識字率は改善された。小学校の管理はコムーネから国家に移管された。教科書には古代イタリアと近代イタリアの連続性を示すものが現れて、軍国主義教育も本格化し、教科書『進め、少年たちよ』には「僕も兵士になりたい」の章やリビア植民地の話が登場した。

第1次世界大戦中には（第5章）、愛国心と戦争協力を求める教科書や人間ピノッキオが兵士として前線で戦う内容の本も出版された。戦後、各地に建立された戦没者追悼記念碑前での慰霊式典では子どもたちが動員され、小・中学の成績優秀者の「名誉の衛兵」が行進に参加し、戦死者を讃えた。

ファシズム政権初期の公教育相ジェンティーレによる中等教育改革の目的は「学校を少なく、良い学校を」という厳格なエリート教育の強化であった。検定制が導入されたが、教科書の内容には立ち入らず、1925年の読本にはファシズムもムッソリーニの名前もなかった（第6章）。

第7章から第9章はファシズム独裁の形成・確定期が対象である。マッテオッティ危機を脱したムッソリーニは、ファシズム独裁体制の建設に着手し、その基礎として新しい「ファシストの人間」の創造を教育に求めた。その形成はバリッラ（1926年創設）と国定教科書を通じて行われた。未来の兵士である子どもを鍛錬し、軍隊的に規律化し、ファシスト精神を刷り込むことが目的であった。

「教科書を通じて学校のファシズム化を完成する」ことを狙って1930-31年学期から国定教科書が導入された。35年以降の教科書はローマ進軍、ファシズムのベファーナなどのファシズム暦、農業暦、宗教暦の諸事業の中にムッソリーニ神格化、国王・王室と帝国賛美が盛り込まれている点で共通している。

1934年の教育指導要領は「軍事化した国民の形成」「新しいイタリア人の形成・完成」めざし、バリッラを徳・訓練・勇気の学校と位置づけ、小学校と一体化させ、軍事文化教育を推進しようとした。教科書には「ファシスト思想が充満した」。青年の準軍事組織と学校制度の緊密な結合を前提に、教育義務と軍役、学齢と政治的学齢を一致させ、教育の完全

なファシスト化をめざした。38年からは反ユダヤ主義キャンペーンが始まり、39年出版の『ファシストの第二の書』（小中学校用）には人種主義、反ユダヤ主義、ドゥーチェやファシスト体制の説明などファシズムの政治的宣伝が記述されていたが、他の教科書には反ユダヤ主義の記述はなかった。38年出版『小学4年生の読本』には「シーザーとムッソリーニ」「イタリア第1番目の兵士」（国王）「鉄の結婚指輪」（王妃）の章があり、ムッソリーニは「神がつかわした天才」とされた。第10章ではファシズムの少国民形成が成功したか否かを検討している。

著者は、本書の末尾で近現代イタリアの少国民形成の特質として、地域的・社会階層的にまだら模様であったこと、王国成立以来、立憲君主制下でサヴォイア家が一貫して統合原理であったこと、「上から」だけでなく民衆の側からの自発的な「下からの」運動もあったことの3点を挙げている。

本書を読んで印象的であったことをまず述べておこう。第一は、イタリア社会の多様性を反映し、教科書が農村・都市・民衆コース向けなど多様であり（『農民と職人』『イタリアの職人』）、自助論など時々の時代の思潮の影響を受けた教科書があったことである。これには、共和主義者や民主主義者の「下からの運動」や教科書が認可制であったことも寄与していると思われる。第二は、ファシズム時代以前から「市民の権利と義務」や「イタリア史」「道德教育と鍛錬」などの新教科の開設や教科書『イタリアの良き子ども』『家族と祖国』などが示すように、愛国心や道德観、植民地支配、軍国主義など国家が目標とする少国民像に沿って徐々に教育が再編されていったことである。この点は著者のこれまでの『「クオーレ」の時代』（1993年）や『大理石の祖国』（1997年）でも明らかにされてきた。第三は、ファシズム独裁時代にはバリッラと学校の一体化が示すように、学校教育が自立性を失ってファシスト党組織・国家による「ファシスト的人間」と兵士養成の道具、ムッソリーニ神格化と戦争賛美、ファシズム信仰を強要する場となったことである。

さて、本書を日独伊のファシズム体制の比較の視点から読むと、いくつかの問いが浮かぶ。第一は、イタリア近現代国家の少国民形成の特質とファシズム期の少国民形成との関係である。第二は、ファシズム的少国民の特徴は何かである。

第一の問いについて著者は、ファシズムの少国民形成はそれ以前の時代の少国民形成と深く関連して

おり、その延長上に位置づけていると見て良い。立憲君主国家であったイタリア王国ではサヴォイア家への忠誠が一貫して機能した統合原理であり、ファシズム期も継続していた。ファシズム時代の統合原理はムッソリーニと国王の「二頭政治」であった（1頁）。私なりに展開すれば、それゆえ、迫り来る敗戦による王制の危機に直面したとき、王制の忠誠グループを中心に宮廷・軍・ファシスト幹部による1943年7月のムッソリーニ解任のクーデタが可能となった。同時に、戦後、サヴォイア家はファシズム責任を国民から問われ、国民投票で共和制が選択された。日本は大天皇制、ドイツはヒトラーの一元的な統合原理・忠誠であったが、イタリアは二元的であったことが本書で確認できる。

第二のファシスト的少国民形成の特徴は、徹底したムッソリーニ崇拝と戦争賛美、「信じ、従い、戦う」「ファシスト的人間」の創造であり（この点は日独伊共通）、著者は明確に述べていないが、人文主義の色彩を帯びていたファシズム以前との断絶と言って良い。ただ、著者も言うように「ファシスト的人間の創造」がどこまで成功したかはなお検討を要する。強い圧力にもかかわらず、バリッラへの加入状況は多様で、体制崩壊後の社会共和国期には、バリッラで育った世代はレジスタンス運動とイタリア社会共和国軍へと分かれ戦った。ドイツでは一部に逸脱行動はあったが、青少年はヒトラー・ユーゲンに強固に組織され、戦争末期に空軍補助員や「ベイビー師団」等の志願兵として最後までヒトラーに忠誠を誓って戦った（原田一美『ナチ独裁下の子どもたち』講談社選書メチエ、1999年）。日本では中学生の少国民は工場の勤労動員や志願兵にされ、沖縄では鉄血勤皇隊や看護部隊に動員され、命を落とした。多くの少国民は忠君愛国精神の下、体制に忠実であった（山中恒を参照）。

このような比較からイタリア・ファシズム体制の不完全性が指摘できる。その原因は著者が強調するように、近現代イタリアの統合原理が憲法とサヴォイア家であったことかもしれない。では、戦後のイタリア共和国の統合原理や「少国民」像は何かという問いが現代日本との対比で発せられる。イタリアでは2008年新教科「市民と憲法」が初等・中等教育に導入され、日本では2022年から高校に新教科「公共」「歴史総合」が導入される。まさに「すべての歴史は現代史である」（B・クローチェ）と言える。

（龍谷大学教授）

西田慎・梅崎透編著

『グローバル・ヒストリーとしての
「1968年」

—— 世界が揺れた転換点 —— 』

(ミネルヴァ書房・2015年7月刊・四六判・)
450頁・本体価格3,500円

竹 林 修 一

1968年という年は、日本では、学園紛争で荒れ狂った年と記憶されているかも知れない。この年は、日本だけでなく、世界各地が体制側・反体制側両方による「暴力」で覆い尽くされた一年だった。ベトナムでは北ベトナム軍によるテト攻撃があり、チェコスロヴァキアでは学生が大規模デモを行い（のちにソビエトが鎮圧）、パリでは学生と警察が衝突し、メキシコ・シティ・オリンピックではアメリカ代表黒人短距離走者が表彰式でブラック・パワー・サルートをを行い、ボリビアではキューバ革命の立役者チェ・ゲバラが処刑され、西ドイツではデモに参加した学生が警官に射殺され、中国では文化大革命が進行していた。アメリカでは、コロンビア大学で学生による学長室占拠、キング牧師やロバート・ケネディら要人の暗殺、デトロイト他の都市でアフリカ系アメリカ人の暴動、そして民主党全国大会での学生デモ隊と警察の衝突が見られた。ほかにも、第三世界における独立・自治をめぐる闘いなど、挙げていけばきりが無い。

これらの出来事は世界的同時代性のなかで起きた。では、いったいどういう状況が1968年当時存在していたのか、その歴史的背景や帰結は？ 1968年は現代にどう影響を及ぼしているのか。本書はこれらの問いに答えようとする意欲作である。

本書は三部構成となっている。序章に続く第Ⅰ部は1968年の状況を引き起こした歴史的要因4つ（ベトナム戦争、第三世界、新左翼、そしてサブカルチャー）を論じる。第1章「ベトナム戦争の余波」は、アメリカのベトナムに対する干渉が多方面に影響を与えた経緯とその範囲について考察する。戦況が膠着化するにつれ、国内世論の支持を失っていったとともに、他の先進国の反戦運動にも火を付けた。このグローバルな反戦運動が、冷戦と民族自決に関係づけられている。第2章「第三世界の現実」は、1960年代に広がりを見せた独立をめぐる旧盟主国との闘争について、その歴史的状況を詳述するとともに、

各国の内部状況が、脱地域的な革命勢力とふれあうことで変化したことを論じる。それは第三世界内部の同志との繋がりだけではなく、欧米においては革命的ヒロイズムとして想像をかき立てた。第3章「新左翼の台頭」は、米、英、西独、日本の新左翼（ニューレフト）運動の比較分析である。各国における新左翼の発展は様ではなかったが、共通するのは社会主義陣営における転機（スターリン死去とその後のスターリン批判、ハンガリー侵攻など）に対して反応したことである。さて、新左翼が展開したのは政治闘争だけでなく、文化闘争という面も多分にあり、その一例として第4章「サブカルチャーが社会を変える」は、西ドイツの反体制文化とメディアが果たした役割を論じる。西ドイツでは反体制運動が全国に広がる際に、服装や音楽といったサブカルチャーが支持獲得の大きな触媒を果たした点にも触れる。

第Ⅱ部では、国ごとに「1968年」の記述がなされる。第5章「アメリカ 運動の盛衰と文化変容」は、1960年代経験の起源を第二次世界大戦後から掘り起こし、郊外化、好景気、大量消費の裏で、人種差別、女性差別、冷戦下の政治的緊張、疎外という心理的不安を抱えていたことを指摘した上で、これらの相反的な社会環境で育ったベビーブーマーたちが、社会の変革を求めて立ち上がり、やがては先鋭化していく過程を考察する。第6章「西ドイツ APO」では、敗戦後の高度経済成長期に議会外反対派（APO）と呼ばれる勢力が登場する過程を考察する。アメリカと同じく、対抗勢力の中心となった大学生が大学の学問的自由やベトナム反戦などを掲げて運動を組織化した。学生たちは当時の西ドイツ政権に対しても反発した。典型例が1968年に成立した大連立政権と非常事態法案に対する反対である。第7章「フランス 5月革命」においても、アメリカや西ドイツ同様、戦後経済成長の恩恵を享受した若い世代が、政府に立ち向かったという点が論じられる。しかし、フランスでは、アルジェリアとの戦争を経験したこと、学生運動は労働者と連帯したという点で独自性を帯びる。第8章「イギリス ニューレフト」は、反ベトナム戦争運動と核軍縮運動（CND）を論じる。ここでも、戦後の社会変化の表出として「1968年」が位置づけられている。第9章「チェコスロヴァキア プラハの春」は、東側陣営における学生運動の事例が分析される。改革運動は共産党内部で起こり、知識人が旗手となって学生

を組織した点が特徴的である。興味深いのは、学生を連帯させた要因としてポップカルチャー（ザ・ビートルズなど）とメディア（TV、ラジオ）が挙げられていることである。第10章「中国 文化大革命の遺したもの」は文化大革命の批判的分析である。文化大革命は中国社会を大きく変えたことはもちろん、先進国にも多大な思想的影響を与えたことが指摘される。第11章「日本 全共闘とベ平連」は、世界の中の日本という視点で、1960年代の反体制運動を代表した2つの組織（全学共闘会議、全国ベトナム平和を！市民・文化団体連合会）を中心に考察する。

第Ⅲ部は、「ポスト1968年」として、「1968年」の動乱が及ぼした影響を3つの面から論じる。第12章「＜新しい女性運動＞とその後」は、アメリカの第二波フェミニズムが1970年代にどのように展開したかを、「1968年」との関係、また1970年代以降顕著になる脱工業化と新自由主義との関係で論じる。第13章「新しい環境運動」は、環境正義運動の広まりについて、1960年代の公民権運動や1970年代の公害問題との繋がりで論じる。特筆すべきは、1970年代末から拡大した環境正義運動は、伝統的環境運動では見られなかったマイノリティが主導している点であろう。最後の第14章「知の変遷」は、1968年以降に知識人が果たしてきた役割を、フランスの雑誌「ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール」を中心に論じる。同誌は狭義の政治雑誌から知の大衆化へ方針転換したことが論じられる。それから、各章の終わりにコラムがあり、関連するテーマを扱った映画が紹介されている。

本書の特徴として次の2つを挙げたい。1つ目は、本書は1960年代の「非体験世代」が「保守・リベラルにこだわらず」、「1968年」を「立体的に捉える」（本書カバー裏）ことを目指した点にある。1960年代研究は、評者の専門とするアメリカ研究分野では、3つの段階を経て今日に至っている。運動を実際に経験した（あるいは率いた）当事者による回顧録あるいは組織史に重心を置いた研究で端緒を開き、第2期として、1960年代を実体験していない研究者たちによる批判的アプローチが登場し、第3期として、西側・東側陣営、第三世界との繋がりにおいて理解する試みが現れた。本書は、第2・第3期の特徴を含んだ研究書と位置づけられる。特に、第Ⅰ部の章立ては「1968年」をグローバルな文脈に位置づけようとする編者の意図を感じさせる。第1章でベトナム

戦争の国際的影響を考察し、第2章に第三世界の論考を置き、第3章で新左翼を越境的に論じる、という構成はまさにグローバルである。2つ目の特徴は、本書が「1968年」以後を視野に入れている点である。それは、現在の政治的・社会的状況の基底は「1968年」に形成されたという問題意識に基づいている（5頁）。とりわけ、執筆者の多くが関心を寄せるのは「1968年」と新自由主義との関係である。この関係について、執筆者により異なるスタンスを読み取れるのは大変興味深い。

1960年代が「記憶」から「歴史に」変わった現在、グローバルな「1968年」を考察する本書に、評者は大いに刺激を受けた。しかしながら、気になる点がないわけでもない。1つ目は、リーダー・組織・イデオロギーを起点にするアプローチに偏っていることだ。おそらく、1950年代から1960年代始めにかけては、各国の運動において明確な政治的課題が存在し（例えば、アメリカの公民権運動）、運動を推進するエージェントを中心に分析するのは理にかなう。しかし、1960年代後半になるとイシューが多様化し、リーダーなき反体制運動（大衆化）に様変わりした。そうすると、分析手法も他のアプローチを取り入れるほうが、より深い洞察を得られるだろう。具体的には、ボトムアップ・アプローチ、非政治分野（ポピュラーカルチャー、宗教、経済など）や非エリート層に焦点を当てた記述、あるいは複数の視点から特定の歴史的事象を描く方法（黒澤明「羅生門」のように）などがもっと含まれると、読者はますます有益な視点を持つことができると思われる。もう1つは、「保守・リベラルにこだわらず」と謳うわりには、記述のほとんどがリベラルの立場からなされていることである。確かに、リベラル勢力が影響力を発揮した時代だったが、保守層が手をこまねいて見ていたわけではないと思う（アメリカの例として、大敗した1964年大統領選挙の反省から、保守層・共和党が1968年の地滑りの勝利を得る過程。あるいはローマ教皇の出産制限批判書 *Humanae Vitae*）。反体制運動が時代を動かしたことは疑うべくもないが、あれからほぼ50年が過ぎた現在、保守側の抵抗についての議論も1960年代研究の重要な一面であると思われる。

21世紀に入り、「グローバル1960年代」への関心は高まってきている。本書の序章はその良き文献ガイドの役割も果たしている。序章に紹介されていないものを2つ挙げておきたい。2008年に、*The*

Sixties: A Journal of History, Politics, and Culture というジャーナルがRoutledgeから創刊され、その対象には国際関係、脱植民地化、南北対立、サバルタン、サブ・ナショナル・グループなどを含む。2009年には、American Historical Associationが2号にわたって“The International 1968”と題する特集を組んだ¹⁾。

「1968年」研究は、研究者それぞれの立場は異なれども、最終的には「68年の帰結はすべて資本主義に取り込まれてしまったのか」(248頁)という問題に行き着くように思う²⁾。効率・合理性を追求する資本主義と、個人の自由を最大限保証しようとするリベラリズムとの折り合いをどこでつけるのか。新自由主義はその答えの1つなのかもしれない。それ以外の選択肢は？これは現代の重要課題であり、「1968年」の批判的考察はその糸口を提供する役割を持つ。

本書の刊行によって、「1968年」研究に有益な文献がまた一つ加わることとなった。特に、現代史に関心のある者なら研究地域・研究領域を問わず、一読する価値がある。「1968年」研究の範囲は多岐にわたるので、本書が扱えなかったテーマもある。続編の刊行が切に望まれる。

(神戸大学非常勤講師)

註

- 1) “The International 1968 Part I,” *American Historical Review* (February 2009); “The International 1968 Part II” (April 2009). 計6本の論文が掲載された。ドイツ、日本、メキシコ・ウルグアイ・ブラジルに焦点をあてた論文のほかに、学生運動を汎地域的に考察、ジェンダーの観点からの考察、ヨーロッパの若い世代の移動に関する論考が収録された。
- 2) 最近出版されたものでは、例えば、Joseph Heath and Andrew Porter, *Nation of Rebels: Why Counterculture Became Consumer Culture*. New York: HarperCollins, 2005; David Brooks, *Bobos in Paradise: The New Upper Class and How They Got There*. New York: Simon & Schuster, 2010.

博士論文要旨掲載に関するご案内

『西洋史学』では新しい研究成果に関する情報を広く周知する目的で、下記の要領にて西洋史学分野に関連する博士論文要旨を掲載しております。つきましては、情報の提供にご協力下さいますようお願い申し上げます。なお、博士論文要旨の投稿に関しましては会員である必要はございません。

記

- ・対象：国内の大学で学位を取得した者、および海外の大学で学位を取得した日本人
- ・必須事項：

- ①取得者氏名・論文タイトル・学位記番号
- ②取得者氏名のローマ字表記、および論文タイトルの英語訳
- ③大学名・学位の種類(ex. 博士(文学))・主査(1名のみ)の氏名
- ④内容：要旨(400字)

※注意：

- ①応募の際は必ず、各大学が発行する学位取得証明書を添付してください。
- ②募集は学位授与日が2015年4月以降のものに限定いたします。
- ③いただいた博士論文要旨は年度2号に掲載いたします。